



Sun Fire™ X4500/X4540 サーバー インストールガイド

Sun Microsystems, Inc.
www.sun.com

部品番号 820-5996-10
2008 年 7 月、改訂 A

コメントの送付 : <http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

Copyright © 2008 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

この配布にはサードパーティで開発された素材が含まれている可能性があります。Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Java、Netra、Solaris、Sun Ray および Sun Fire X4540 バックアップサーバーは、米国およびその他の国における Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標です。

この製品は、米国の輸出規制法の範囲であり、同法により規制されます。また、その他の国の輸出または輸入に関する法律による規制を受ける可能性があります。核、ミサイル、化学生物兵器、または海洋における核のエンドユーザーは、直接または間接を問わず、厳しく禁じられています。米国が通称を禁止している国、または米国輸出除外リストに掲載されたエンティティ (拒否対象人物および特別に指定された国家を含むがこれに限定されない) に対する輸出または再輸出は、厳しく禁じられています。米国輸出法に準拠して輸出された製品では、予備または代替 CPU の使用は、修復または 1 対 1 の CPU の交換に限定されます。米国政府に承認されない限り、CPU を製品のアップグレードとして使用することは、厳しく禁じられています。



リサイクル
してください



Adobe PostScript

目次

はじめに xi

1. Sun Fire X4500/X4540 サーバーハードウェアの取り付け 1

開始前のご注意 2

システムボックスの内容 2

取り付け概要 3

必要なツール 4

必要な作業要員 4

機械によるリフトを推奨 4

重量を減らすためのコンポーネントの取り外し 5

互換性のあるラック 5

スライドレール構成部品の取り外し 6

外部レールと中央レールの接続場所の決定 8

外部レールまたは中央レールの接続 9

ラック取り付け補助装置 10

内部レールのシャーシへの接続 14

シャーシからの内部レールの取り外し 15

システムのラックへの取り付け 16

スライドレールの動作の確認 19

X4500 のケーブル管理アーム (CMA) の取り付け 20

CMA の接続	20
CMA の動作の確認	26
CMA の取り外し	27
システムのラックからの取り外し	27
配線およびコネクタ	28
サーバーの電源の投入および切断	30
▼ サービスプロセッサ (SP) の初期設定のためにスタンバイ電源を適用するには	31
▼ 主電源モードに入るには	31
▼ 主電源モードの停止	33
2. サービスプロセッサを使用した Sun Fire X4500/X4540 サーバーの設定	35
Integrated Lights Out Manager ソフトウェアの概要	36
ILOM サービスプロセッサへの接続	38
シリアル接続を使用した ILOM への接続	38
Ethernet 接続を使用した ILOM への接続	40
BIOS セットアップユーティリティを使用した IP アドレスの設定	41
DHCP を使用した ILOM の設定	42
静的 IP アドレスを使用した ILOM の設定	43
ILOM コマンドリファレンス	46
3. あらかじめインストールされた Solaris オペレーティングシステムの設定	51
開始前のご注意	52
インストールワークシートの情報の収集	52
IO ボードおよび SP の MAC アドレスの検出	55
Solaris OS インストールおよびブート可能なハードディスクドライブの重要なガイドライン	56
Sun Fire X4500	56
Sun Fire X4540	57

- ▼ ブート可能ディスクを判定して Solaris OS を再インストールするには 57

Solaris OS トレーニング 59

あらかじめインストールされた Solaris オペレーティングシステムの設定 60

- ▼ サービスプロセッサの CLI に接続するには 60
 - 開始前のご注意 61
- ▼ SSH またはシリアルケーブルを使用してサービスプロセッサに接続するには 61
- ▼ コンソールの出力をビデオポートにリダイレクトするには 62
- ▼ コンソールの出力をルートデバイス、ルートミラー、または VGA にリダイレクトするには 63
- ▼ サービスプロセッサの IP アドレスを使用してサーバーに接続するには 63
- ▼ 端末プログラムを使用してサーバーに接続するには 65
- ▼ シリアルキャプチャプログラムを使用してサーバーに接続するには 66

Solaris インストールプログラムの使用 67

開始前のご注意 67

インストール時 67

Sun Java Enterprise System 68

Sun Studio 11 コンパイラおよびツール 68

Sun N1 System Manager 68

インストール後 69

hd ユーティリティ 69

Solaris オペレーティングシステムの再インストール 70

ソフトウェアのダウンロード 70

他のオペレーティングシステムのインストール 71

索引 73

目次

図 1-1	取り付け前のスライドレール構成部品の取り外し	7
図 1-2	システムの取り付け場所の決定	8
図 1-3	レールの接続	10
図 1-4	ラックの前面での間隔ツール (ラック取り付け補助) の使用	11
図 1-5	ラックの背面での間隔ツール (ラック取り付け補助) の使用	12
図 1-6	背面右側にある固定部品のネジの締め付け	13
図 1-7	内部レールのシャーシへの接続	14
図 1-8	シャーシからの内部レールの取り外し	15
図 1-9	システムをスライドレールに挿入するための正しいセットアップ	17
図 1-10	内部レールが正しい角度で挿入された状態にします	18
図 1-11	外部レール拡張部品の取り付け	21
図 1-12	CMA の折り畳み	22
図 1-13	右の CMA ヒンジ板の CMA 固定部品への挿入	23
図 1-14	左の CMA アームの左のレールへの取り付け	24
図 1-15	ストラップ付き CMA アームを通した配線パスの例	25
図 1-16	配線後の CMA アームの折り畳み	26
図 1-17	Sun Fire X4500 サーバーの背面パネル	28
図 1-18	Sun Fire X4540 サーバーの背面パネル	29
図 1-19	Sun Fire X4500/X4540 サーバー電源ボタン	32
図 1-20	Sun Fire X4500/X4540 サーバーの前面パネル	33

- ☒ 2-1 Integrated Lights Out Manager GUI ログインページ 36
- ☒ 2-2 Integrated Lights Out Manager のネットワーク設定ページ 46

表目次

表 1-1	Sun Fire X4500/X4540 のドキュメントセット	2
表 2-1	シリアル管理ポートのピン配列	39
表 2-2	ILOM コマンドの例	46
表 3-1	インストール用ワークシート	52

はじめに

本書では、Sun Fire™ X4500/X4540 サーバーのインストール方法について説明します。

本書は、サーバーシステムのインストールを深く理解していて、そのスキルも有する訓練された技術者用です。

以下の章が含まれます。

- 1 ページの「Sun Fire X4500/X4540 サーバーハードウェアの取り付け」
- 35 ページの「サービスプロセッサを使用した Sun Fire X4500/X4540 サーバーの設定」
- 51 ページの「あらかじめインストールされた Solaris オペレーティングシステムの設定」

関連ドキュメント

すべての Sun ハードウェアおよびソフトウェアのドキュメントは以下の URL で入手できます。

<http://docs.sun.com/>

Sun Fire X4500/X4540 サーバーの最新情報については、ハイエンドサーバーおよび x64 サーバー製品カテゴリリンクを使用して、Sun Fire X4500/X4540 ドキュメント集に移動してください。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/sf.x4500>

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/sf.x4540>

また、製品の世界リリース日以降は、一部のドキュメントのローカライズ版もご利用になれます。ドロップダウンリストから言語を選択して、Sun Fire X4500/X4540 x64 のドキュメント集に移動してください。Sun Fire サーバーで利用可能なローカライズ版には、簡体字中国語、繁体字中国語、フランス語、日本語、および韓国語が含まれます。

英語版は頻繁に改訂されており、翻訳版よりも最新の情報が記載されています。

UNIX コマンドの使い方

本書には、基本的な UNIX® コマンドや、システムのシャットダウンや起動、デバイスの設定などの手順に関する情報は含まれていないことがあります。このような情報については、次のマニュアルを参照してください。

- システムに付属のソフトウェアマニュアル
- 次の場所にある Solaris™ オペレーティングシステムのドキュメント

<http://docs.sun.com>

サードパーティーの Web サイト

Sun 社は、本書で挙げているサードパーティーの Web サイトの利用について責任を負いません。また、当該サイトまたはリソースから入手可能なコンテンツや広告、製品またはその他の素材を推奨したり、責任あるいは法的義務を負うものではありません。さらに、他社の Web サイトやリソースに掲載されているコンテンツ、製品、サービスなどの使用や依存により生じた実際の、または疑わしい損害や損失についても責任を負いません。

書体と記号について

書体または記号*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例。	.login ファイルを編集します。 ls -a を実行します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表します。	% su Password:
AaBbCc123	コマンド行の可変部分。実際の名前や値と置き換えてください。	rm filename と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「 」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第 6 章「データの管理」を参照。 この操作ができるのは「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	% grep `^#define \ XV_VERSION_STRING`

* 使用しているブラウザにより、これらの設定と異なって表示される場合があります。

コメントをお寄せください

Sun 社は、製品の改善を常に心がけており、皆様のコメントを歓迎いたします。Sun Fire X4500/X4540 ドキュメントのコメントは、以下の URL にご連絡ください。

<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

フィードバックには、本書のタイトルと部品番号を記載してください。

『Sun Fire X4500/X4540 サーバーインストールガイド』。

第1章

Sun Fire X4500/X4540 サーバー ハードウェアの取り付け

この章では、次の項目について説明します。

- 2 ページの「開始前のご注意」
- 3 ページの「取り付け概要」
- 14 ページの「内部レールのシャーシへの接続」
- 16 ページの「システムのラックへの取り付け」
- 19 ページの「スライドレールの動作の確認」
- 20 ページの「X4500 のケーブル管理アーム (CMA) の取り付け」
- 27 ページの「システムのラックからの取り外し」
- 28 ページの「配線およびコネクタ」
- 30 ページの「サーバーの電源の投入および切断」

ヒント - 『X4500-J Slide Rail Installation Guide』(X4500-J スライドレール取り付けガイド) では、サーバーをラックに取り付ける際の重大な問題について説明しています。このドキュメントは、注文可能なレールキットボックスに付属しています。また、オンラインでも入手できます。

開始前のご注意

Sun Fire X4500/X4540 サーバーのドキュメントセットには、複数のマニュアルが含まれています。サーバーのセットアップを開始する前に、主要なドキュメントをご確認ください。ドキュメントセットは、新機能 (OS サポートなど) が追加されるにつれて大きくなります。

表 1-1 Sun Fire X4500/X4540 のドキュメントセット

このタスクでは...	このドキュメントを参照してください...
ハードウェアの取り付け、SP のセットアップ	本書 『Sun Fire X4500/X4540 Server Safety and Compliance Guide』 (Sun Fire X4500/X4540 サーバーの安全性およびコンプライアンスに関するガイド)
OS のインストール	本書 『Sun Fire X4500/X4540 Server Installation Guide』 (Sun Fire X4500/X4540 サーバーインストールガイド) 『Sun Fire X4500/X4540 Server Windows Operating System Installation Guide』 (Sun Fire X4500/X4540 サーバー Windows オペレーティングシステムインストールガイド) 『Solaris ZFS Administration Guide』 (Solaris ZFS 管理ガイド)
サーバーの管理	『Sun Integrated Lights Out Manager 2.0 User's Guide』 (Sun Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド) 『Sun Integrated Lights Out Manager 2.0 User's Guide』 (Sun Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド) の付録 『Sun Fire X4500 および X4540 サーバー用 Sun Integrated Lights Out Manager の補足ドキュメント』
問題のトラブルシューティング	『Sun Fire X4500/X4540 Server Diagnostics Guide』 (Sun Fire X4500/X4540 サーバー診断ガイド) 『Sun Fire X4540 サーバーご使用にあたって』
サーバーの保守	『Sun Fire X4500/X4540 Server Service Manual』 (Sun Fire X4500/X4540 サーバーサービスマニュアル)

システムボックスの内容

サーバーおよび電源コードに加えて、システムボックスには、以下のものが含まれています。

- 『Sun Fire X4500 概要書』または 『Sun Fire X4540 概要書』
- 『ソフトウェア使用許諾契約』
- 『Solaris 10 OS の権利書』
- 『Sun ハードウェアシステムの重要な安全性に関する情報』

- SunVTS™ のブート可能な診断用 CD
- Sun N1 System Manager の DVD

取り付け概要

サーバーの開梱後、以下のタスクを実行します。

1. 注文可能なスライドレールを使用して、サーバーをラックに取り付けます。
 - 4 ページの「必要なツール」
 - 5 ページの「これは、機械によるリフトの使用を想定しています。機械によるリフトが利用できない場合には、サーバーからほとんどのコンポーネントを取り外す必要があります。」
 - 5 ページの「互換性のあるラック」
 - 6 ページの「スライドレール構成部品の取り外し」
 - 8 ページの「外部レールと中央レールの接続場所の決定」
 - 9 ページの「外部レールまたは中央レールの接続」
 - 16 ページの「システムのラックへの取り付け」
 - 19 ページの「スライドレールの動作の確認」
 - 27 ページの「システムのラックからの取り外し」
2. すべてのケーブル、周辺機器、および電源コードを接続します。
28 ページの「配線およびコネクタ」を参照してください。
3. サーバーの電源を入れて起動します。
30 ページの「サーバーの電源の投入および切断」を参照してください。
4. Integrated Lights Out Manager (ILOM) で、サービスプロセッサの初期設定を実行します。
35 ページの「サービスプロセッサを使用した Sun Fire X4500/X4540 サーバーの設定」を参照してください。
5. あらかじめインストールされた Solaris オペレーティングシステムを設定します。
51 ページの「あらかじめインストールされた Solaris オペレーティングシステムの設定」を参照してください。

必要なツール

- プラスのねじ回し 2 番、10 インチ、磁気チップ
- 4 ページの「機械によるリフトを推奨」(強く推奨)
- 水平器、大工用 (アルコールまたは気泡)



注意 – システムが重いため、システムをラックに取り付ける際には、機械によるリフトを強くお勧めします。リフトを利用できない場合は、次のコンポーネントを取り外して重量を軽減します。両方の電源、システムコントローラ、48 個すべてのハードドライブ。ファントレイは取り付けられたままにします。48 個のハードドライブは、必ず、取り外した順番に元の位置に戻してください。

必要な作業要員

システムをラックに取り付けるには、少なくとも以下の 3 人以上が必要です。

- システムを取り付けて、リフトを操作する 2 人
- レールが正しくかみあっているようにする監視人 1 人



注 – これは、機械によるリフトの使用を想定しています。機械によるリフトが利用できない場合には、システムからほとんどのコンポーネントを取り外す必要があります。

機械によるリフトを推奨



注意 – スタッフの負傷および装置の損傷を回避するために、サーバーの取り付け時は細心の注意を払ってください。

サーバーが重いため、サーバーをラックに取り付けるためには機械によるリフトを使用することが重要です。

- Sun Fire X4500 サーバーの重量は、コンポーネントが完全に積載された状態で、160 ポンド (72.6 kg) です。
- Sun Fire X4540 サーバーの重量は、コンポーネントが完全に積載された状態で、170 ポンド (77.1 kg) です。

重量を減らすためのコンポーネントの取り外し

リフトが利用できない場合は、次のコンポーネントを取り外して重量を軽減します。

- 両方の電源
- システムコントローラ
- スロット 2 から 46 のハードディスクドライブ。スロット 0 と 1 のブート可能なドライブは取り付けられたままにします。



注意 – 46 個のハードドライブには事前にラベルを付けて、ハードドライブを取り外した同じスロットに戻せるようにします。

注 – ファントレーは取り付けられたままにします。

注 – Sun Fire X4500 のハードディスクマッピングは、行指向であり、前面の行から開始し、前面横断で、左から右に向けて、ドライブ 0 から 11 があります。

Sun Fire X4540 のハードディスクマッピングは、列指向であり、一番左の列から開始し、前面から後面に向けて、左側にドライブ 0 から 3 があります。保守ラベルを参照してください。



注意 – これは、機械によるリフトの使用を想定しています。機械によるリフトが利用できない場合には、サーバーからほとんどのコンポーネントを取り外す必要があります。

互換性のあるラック

注 – Sun Fire X4500/X4540 サーバーは奥行きが深いため、1,000 mm サイズのラックが適しています。このサイズの Sun Rack 1000-42 と Sun Rack 1000-38 を使用してください。

Sun Fire X4500/X4540 サーバーのスライドレールは、以下の標準規格に合致した、さまざまな装置ラックと互換性があります。

- 4 ポスト構造 (前面と背面の両方でマウント)。2 ポストラックには互換性がないことに注意してください。

- ラックの水平方向の開口部およびユニットの垂直方向のピッチが、ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 標準規格に準拠。
- 前面の取り付け面と背面の取り付け面の距離が、23 から 34 インチ (580 mm から 870 mm)。
- 前面ラック取り付け面の前の (前面キャビネットドアまでの) 奥行き隙間の最小値：1.85 インチ (47 mm)。
- 前面ラック取り付け面の後ろの (背面キャビネットドアまでの) 奥行き隙間の最小値：(外部 SAS ケーブル使用時を除いた、システム外部ケーブル接続に使用される) ケーブル管理アームを使用する場合は、38 インチ (965 mm)。ケーブル管理アームを使用しない場合は、33.5 インチ (851 mm)。Sun 4RU HDD 製品には、1,000 mm サイズのラックが最適です。それらの製品には、このサイズの Sun Rack 1000-42 と Sun Rack 1000-38 を使用してください。
- 前面取り付け面と背面取り付け面の間の (構造的支柱とケーブルの溝の間の) 幅隙間の最小値：19 インチ (483 mm)。ラックの各側の隙間は、前面と背面のラック取り付け構造体のエッジの間にある面の少なくとも 0.5 インチ (12.7 mm) 以上外側にある必要があります。
- 前面取り付け面と背面取り付け面の間の (構造的支柱とケーブルの溝の間ではない) 幅隙間の最小値：18 インチ (456 mm)。



注意 – 装置は常にラックの底部から上へと取り付け、ラックの上が重くなって転倒しないようにします。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止バーを配備します。手順については、Sun Fire X4500/X4540 サーバーのカバーの保守ラベルまたはラックのラベルを参照してください。

Sun 製のラック製品の詳細については、次の Web ページをご覧ください。

<http://www.sun.com/servers/rack/index.html>

スライドレール構成部品の取り外し

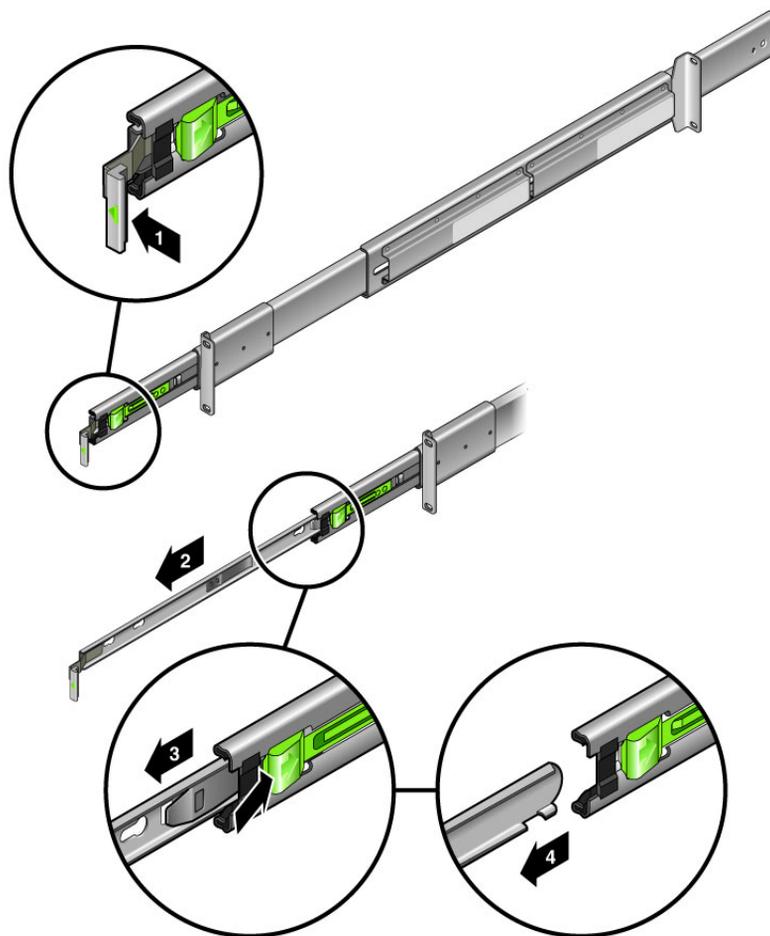
スライドレール構成部品は、組み立てられた状態で出荷されていますが、ラックの取り付け開始前に、以下の手順に従って、分解する必要があります。構成部品には、以下の部品が含まれています。

- 外部レール (ラックにマウントされる部品)
- 中央レール (構成部品のスライド部品)
- 内部レール (サーバーシャーシにマウントされる部品)

この手順を開始する前に、梱包ボックスからスライドレール構成部品を開梱してから、平らな平面に 1 つ置きます。サーバーシャーシにマウントしようとする前に、(この手順の説明のとおり) 内部レールを取り外す必要があります。

1. スライドレールのロックを押して、中央レールから、内部ストップに接触するまで内部レールを引き出します。図 1-1 の 1 および 2 とラベル付けされた矢印のあるインセットを参照してください。

図 1-1 取り付け前のスライドレール構成部品の取り外し

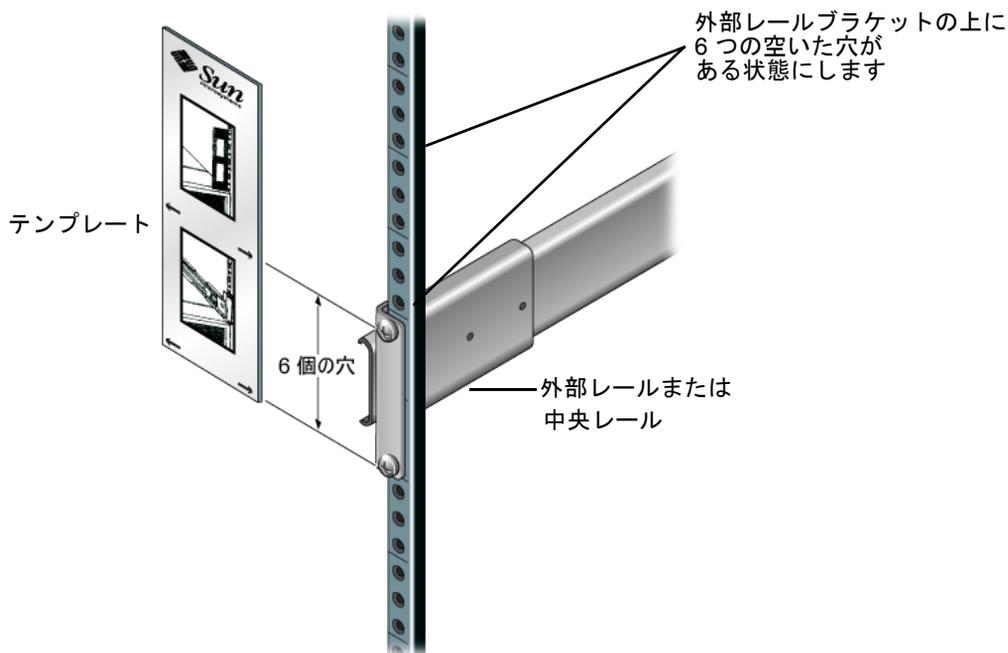


2. (突き出した矢印の付いた) 緑の取り外しレバーを押して、スライドレール構成部品から内部レールを完全に抜き出します (取り外します)。図 1-1 の 3 とラベル付けされた矢印のインセットを参照してください。
3. 残りのスライドレール構成部品についても、ステップ 1 と 2 を繰り返します。

外部レールと中央レールの接続場所の決定

1. サーバーを取り付ける、ラック内の場所を決定します。
Sun Fire X4500/4540 サーバーは、縦型の 4 ラックユニットシステムです。Sun Fire X4500/X4600 ラックマウント・テンプレートは、注文可能なスライドレール構成部品に標準装備されているペーパーテンプレートです。
2. ラックにマウントされた下のシステムの上にラックマウントテンプレートをセットします。
3. ラックマウントテンプレートの矢印が示す場所に、外部レールまたは内部レールを取り付ける準備をします。
1 つのラックユニットに 3 つの穴があるラックでは、Sun Fire X4500/X4540 サーバーによって、1 つのラック列ポストごとに縦に 12 個の穴が占有されます。☒ 1-2 を参照してください。

図 1-2 システムの取り付け場所の決定



外部レールまたは中央レールの接続

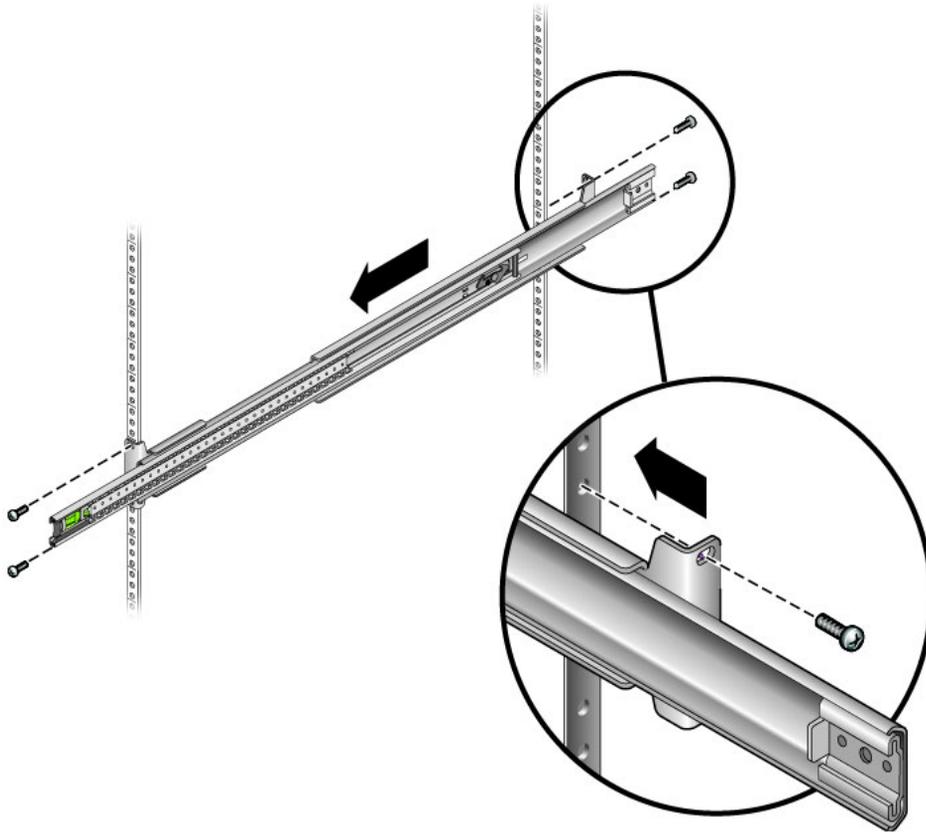
組み立てを開始する前に、以下のものを用意します。

- プラスのねじ回し 2 番
 - レールのマウント用ハードウェア 1 セット (8 つのネジを含む)
1. ラックの前面ポストおよび背面ポストに対して、縦方向にスライドレール構成部品を調整します。図 1-3 を参照してください。
 2. 下のネジをまず挿入して、スライドレールを適切な位置に保ちます。
 3. 前面および背面の固定部品の穴に入れたネジを手で締め付けます。
あとでスライドレールの間隔ツール (「ラック取り付け補助」) を使用して最終調整を行うため、ここではネジは手で締め付けます。
 - ラックのラックポストに取り付け用のネジ穴がある場合には、スライドレール固定部品を通してネジ穴に、正しい取り付けネジ (標準またはメトリック) を挿入します。

注 – Sun™ Rack 1000 ハードウェアではメトリックネジを使用します。

- ラックに取り付け用のネジ穴がない場合には、スライドレール固定部品とラックポストを通して、適切な取り付けネジを挿入してから、ケージナットを使用して固定します。

図 1-3 レールの接続



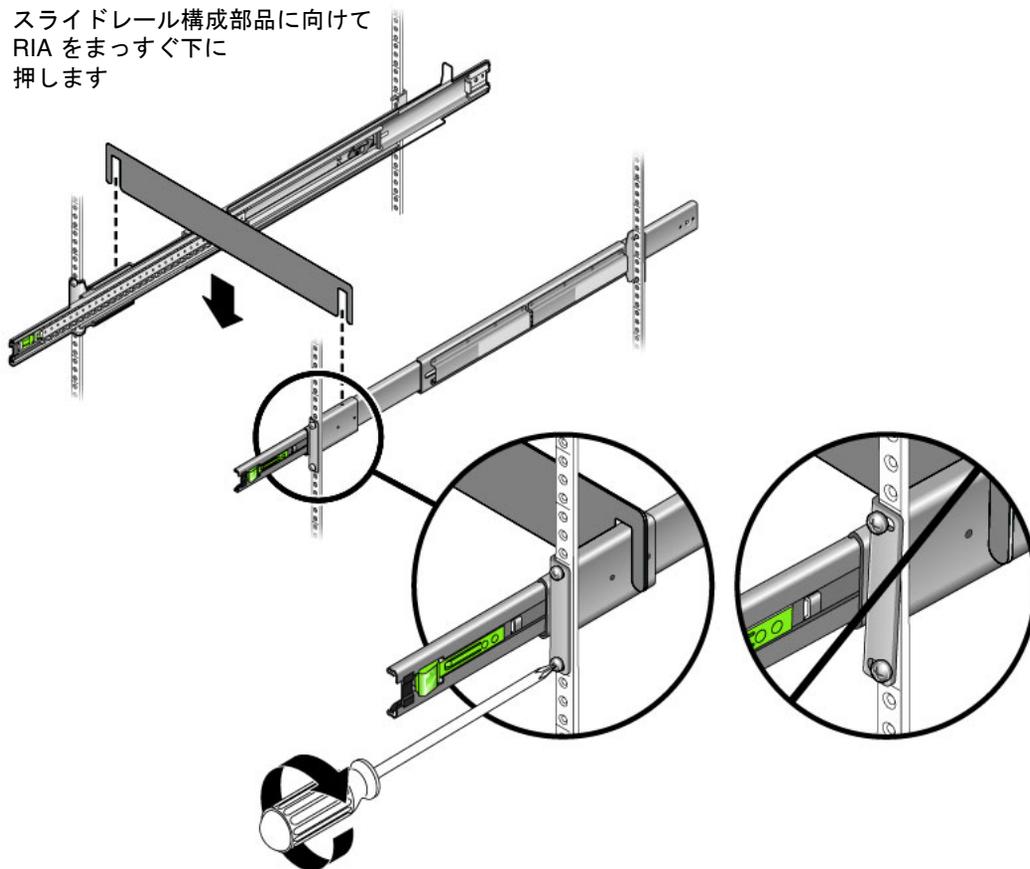
ラック取り付け補助装置

ラック取り付け補助装置 (RIA) は、ラックの取り付け位置を水平にして傾かないように、レールの重大な位置調整と間隔設定を行いやすくするために使用します。

1. 両方のスライドレール構成部品を、前面と背面で緩く固定してから、ラックの前面にある両方のスライドレール構成部品の上に RIA 間隔ツールを配置します。
図 1-4 を参照してください。
RIA 間隔ツールは、ぴったりフィットしている必要があります。また、左右のスライドレール構成部品にしっかりとめ込まれた状態にするために圧力をかける必要があることもあります。
2. 穴を中央に揃えます。図 1-4 を参照してください。
3. プラスのねじ回し 2 番を使用して、左右の前面固定部品の 4 つのネジをすべて締め付けます。

図 1-4 ラックの前面での間隔ツール (ラック取り付け補助) の使用

スライドレール構成部品に向けて
RIA をまっすぐ下に
押しします



4. RIA スライドレール間隔ツールを水平ではない状態で取り外すと配置フランジが変形する可能性があるため、ツールは注意深く取り外します。

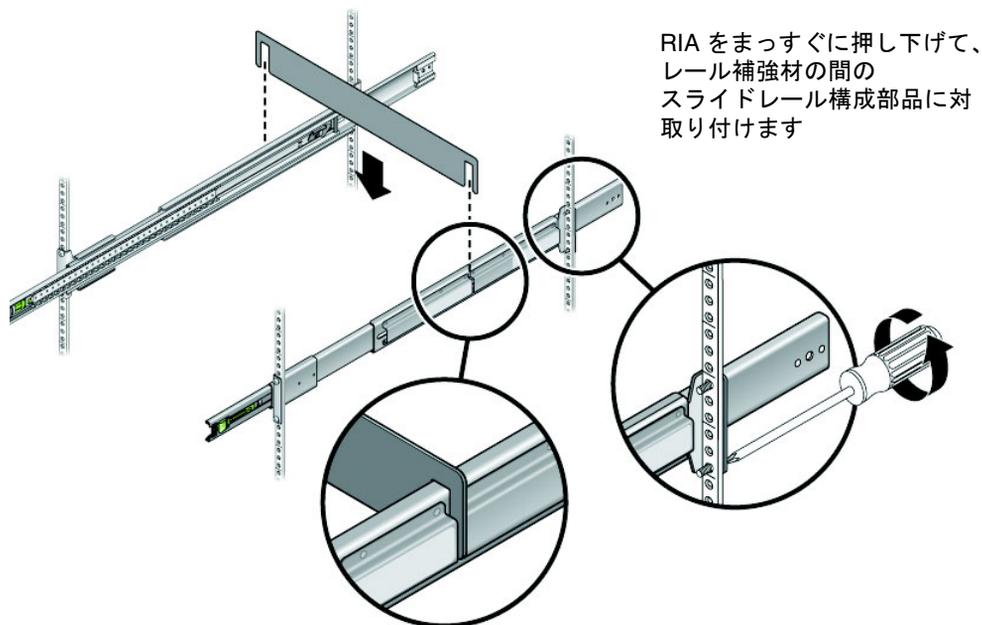
スライドレール構成部品から RIA スライドレール間隔ツールの両端を同時に持ち上げます。RIA を傾けて取り外さないでください。まっすぐ上に持ち上げます。

5. レールの位置合わせを行うために、ラックの背面に移動します。

6. ラックの背面で、レール補強材の間にある、スライドレール構成部品の上に RIA 間隔ツールを配置します。図 1-5 を参照してください。

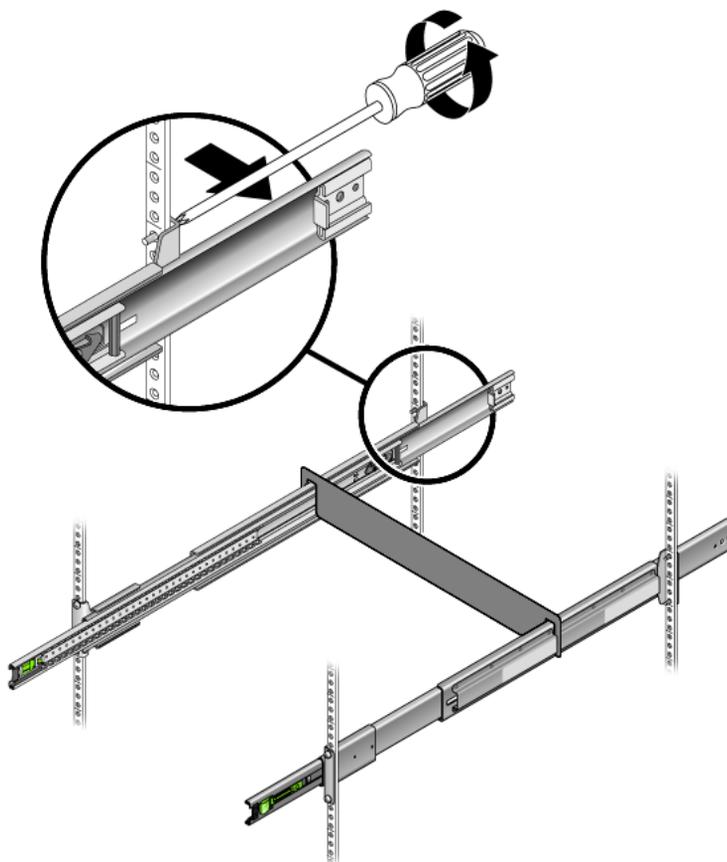
間隔ツールは、ぴったりフィットしている必要があります。また、左右のスライドレール構成部品にしっかりとはめ込まれた状態にするために圧力をかける必要があることもあります。図 1-6 を参照してください。

図 1-5 ラックの背面での間隔ツール (ラック取り付け補助) の使用



7. プラスのねじ回し 2 番を使用してラックの背面にある 4 つのネジすべてを締め付ける際には、間隔ツールを適切な位置に保ちます。図 1-5 および図 1-6 を参照してください。

図 1-6 背面右側にある固定部品のネジの締め付け



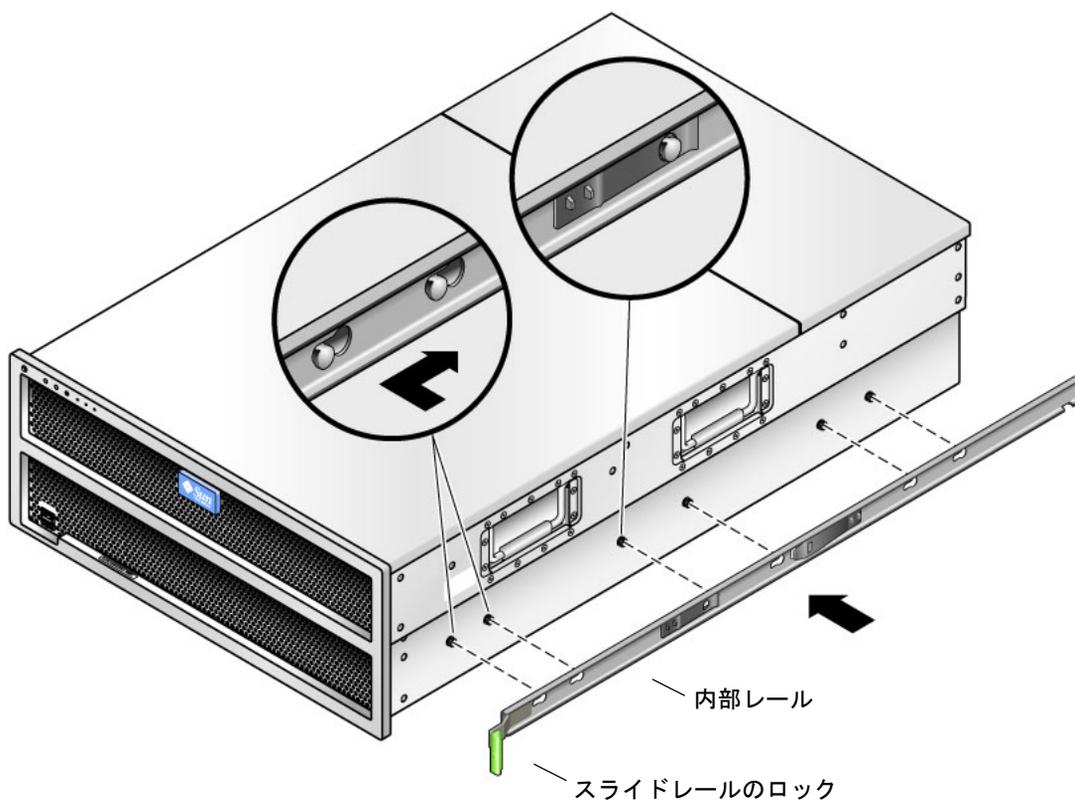
8. RIA スライドレール間隔ツールを急いで取り外すとフランジが変形する可能性があるため、ツールは注意深く取り外します。

両方のスライドレール構成部品から RIA ツールの両端を同時に持ち上げます。

内部レールのシャーシへの接続

1. スライドレールのロックがシャーシ前面に来るように、シャーシに対して内部レールを配置します。図 1-7 を参照してください。

図 1-7 内部レールのシャーシへの接続



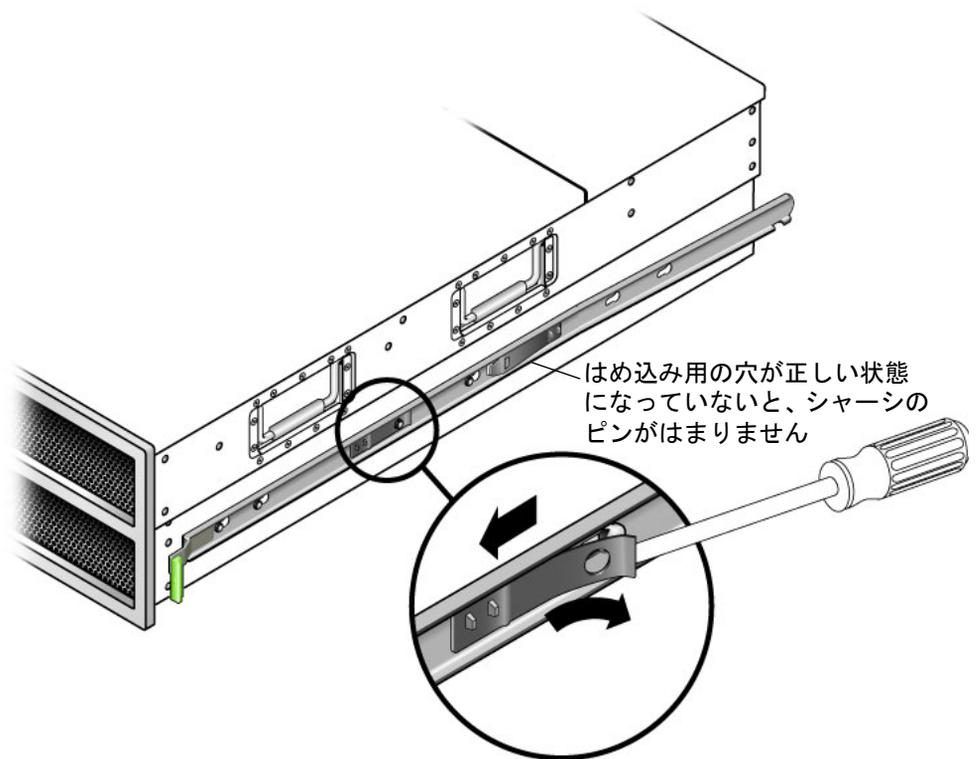
2. 内部レールにある 6 つのはめ込み用の穴と、シャーシの側面にある 6 つの取り付けピンの位置を合わせることによって、シャーシのピン保持ラッチを吊るします。
3. ピン保持クリップがカチっとなってしっかりロックされるまで、シャーシの背面に向けてレールを押しながら、レールの背面部を押し下げます。図 1-7 の矢印のインセットを参照してください。

4. 6つの位置決め用ピンすべてがはめ込み用の穴にはまっていることを確認します。
5. ステップ 1 から 4 を繰り返して、システムの反対側にある残りの内部レールを取り付けます。

シャーシからの内部レールの取り外し

内部レールをシャーシに取り付けた際にはめ込み用の穴にはまっていないシャーシのピンが存在した場合、[図 1-8](#) のようにピン保持ラッチを持ち上げ、内部レールを前に押し取り外してから、前のセクションでリストしたステップ 1 から 4 を繰り返します。

図 1-8 シャーシからの内部レールの取り外し



システムのラックへの取り付け

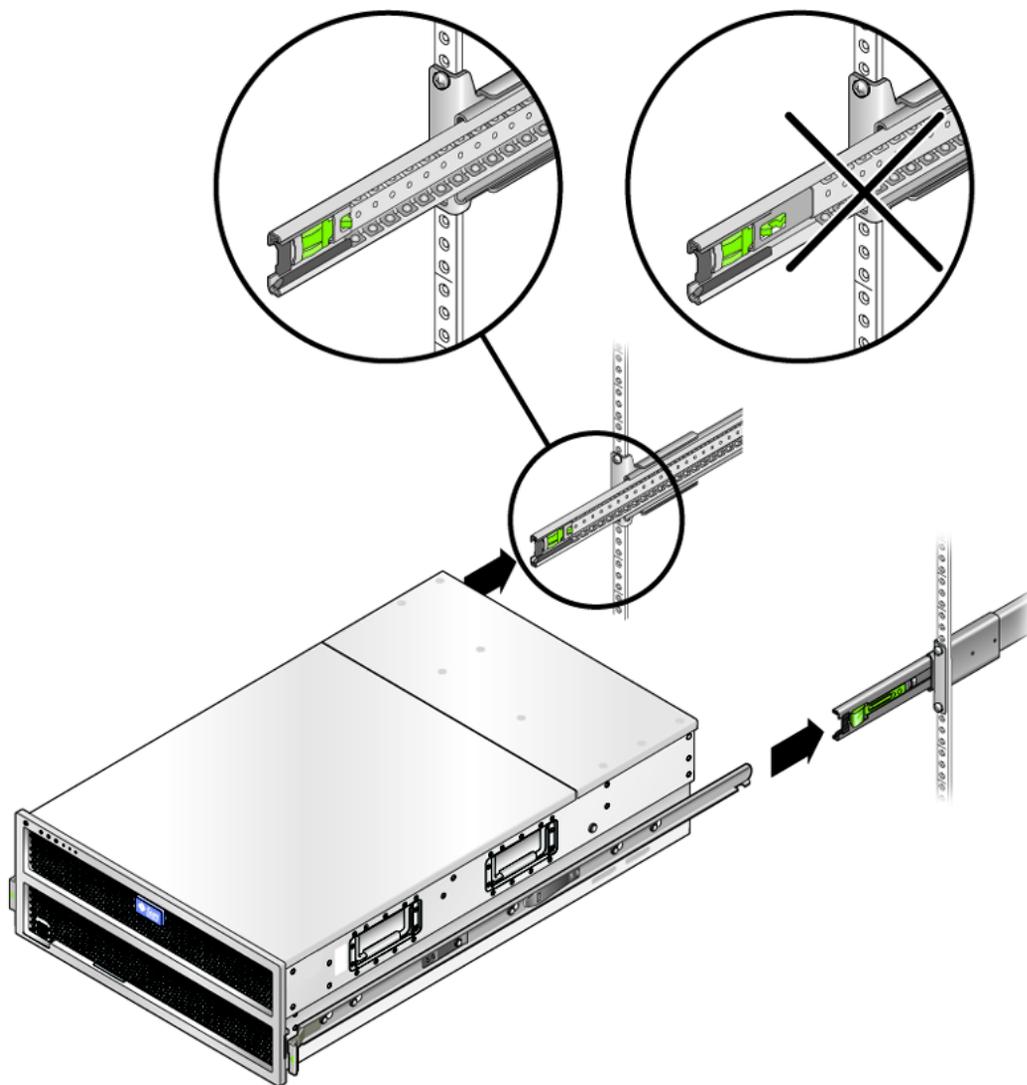
以下の手順では、ラックのスライドレール構成部品に、内部レールを接続したシステムを取り付ける方法について説明します。この作業は3人で行います。

注 – このタスクを開始する前に、シャーシに内部レールが既に接続されている必要があります。



注意 – システムの重量は、コンポーネントがすべてロードされた状態で、160 から 170 ポンド (約 72.7 kg) です。重大な負傷または装置の損傷のリスクを減らすために、機械によるリフトを使用して、システムをラックに取り付けます。リフトが利用できない場合には、以下のコンポーネントを取り外して重量を減らします。電源 2 つ、システムコントローラ、48 個すべてのハードドライブ。ファントレーは取り付けられたままにします。48 個のハードドライブは、必ず、取り外した順番に元の位置に戻してください。

図 1-9 システムをスライドレールに挿入するための正しいセットアップ



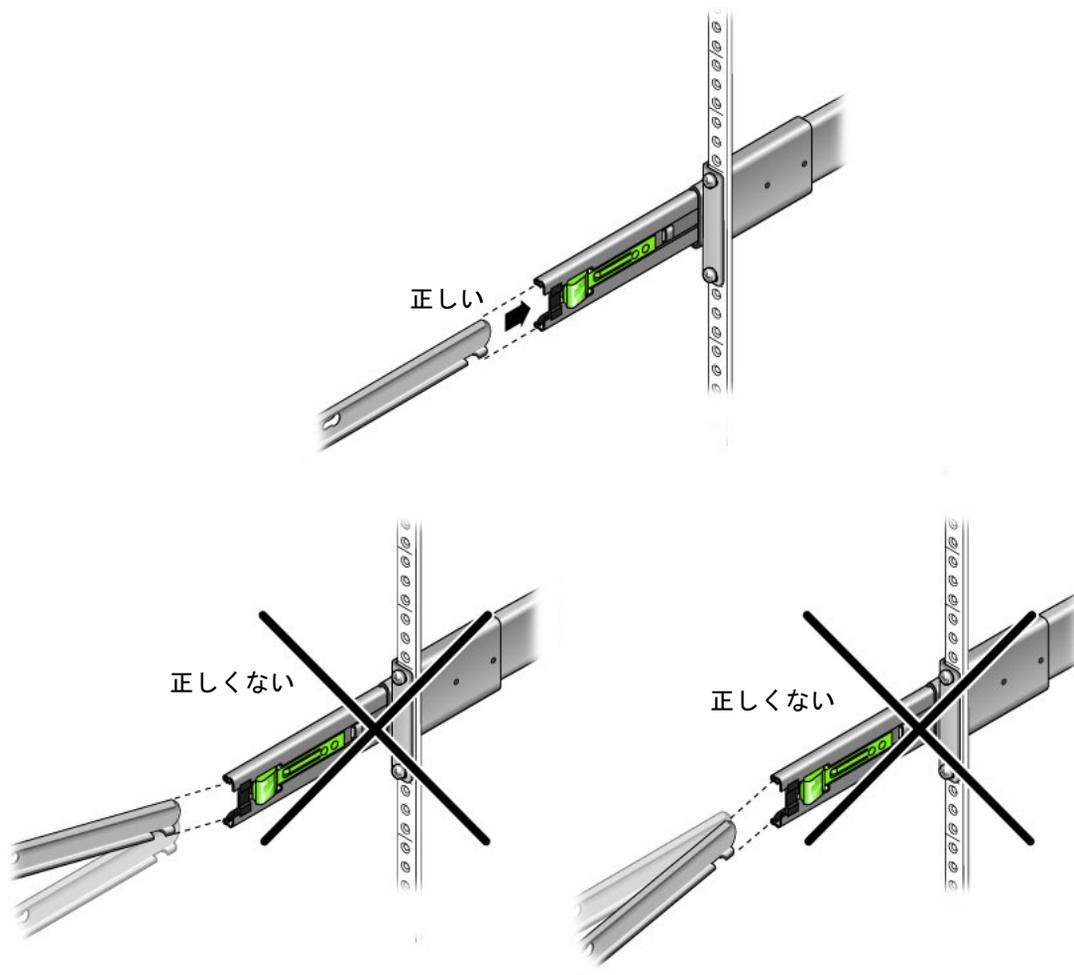
注意 – ボールベアリング止め具が、両方のスライドレールの前面に引き出されていて、緑のラッチに固定されている状態にします。

1. 内部レールをそれぞれの側の入口まで持ってきて、すべてのものができる限り水平になるように保ちます。

2. レールのロックがセットされるように、一度システムをラックにスライドさせます。
3. システムの各側にある緑の取り外しレバーを押し込みます。

注 - 必要に応じて、シャーシに取り付けられた内部レールをラックマウントされた中央レールに平行に位置合わせする際に、機械によるリフトでシステムを支えます。挿入を完全に平行にするためには、大工用水平器を使用することが非常に重要です。

図 1-10 内部レールが正しい角度で挿入された状態にします



注 – 図 1-10 のように内部レールが正しい角度で中央レールに入った状態にします。

4. 図 1-9 のように、システムをラックに押し込む際には、監視人またはオペレーターが、ラックの背面から、内部レールが両方のスライドレールにあるボールベアリング止め具にはまった状態になっていることを確認します。
5. 前面のラッチがロックされるまで、システムをラックにゆっくりと押し込みます。中央レールが自動調節するため、最初の挿入時に少し抵抗を感じる場合があります。

スライドレールの動作の確認



注意 – システムの損傷または怪我を防ぐために、リフトを使用する場合には、リフトをシステムの下に保ってください。人手でシステムを取り付ける場合には、システムの両側のハンドルを保持してください。

1. スライドレールがストップに達するまで、ラックからシステムをゆっくりと引き出します。
2. システムを同時に押してストップを通過させる際には、それぞれのスライドレールの中央レールのリリースボタンを押します (図 1-1 を参照)。
3. 内部ストップに達するまで、システムをラックに押し戻します。
4. スライドレールのロックが入るまで、システムを完全にラックに押し込みつけます。
5. シャーシからコンポーネントを取り外していた場合には、再度取り付けます。ハードディスクドライブは必ず、取り外したのと同じ場所に戻してください。

X4500 のケーブル管理アーム (CMA) の取り付け

システムにケーブル管理アーム (CMA) が標準装備されている場合には、それは、ラックに対してシステムを出し入れする際に IO および電源ケーブルが損傷しないように保護するために提供されているものです。システムに CMA が標準装備されている場合には、CMA を使用しなければ、システムの保守時に電源ケーブルまたはデータケーブルが損傷する可能性があります。CMA キットには以下のものが含まれています。

- CMA シャーシ固定部品
- CMA

注 – 背面 SAS ケーブル接続がある一部の Sun 製ラック可能 4RU 製品では、CMA とともに使用すると SAS ケーブルが損傷する可能性があるため、CMA は標準装備されていません。そのようなシステムの場合は、代替のケーブル管理方法を使用する必要があります。システムに CMA が標準装備されていない場合は、このセクションはスキップしてください。

CMA の接続

1. システムに CMA が含まれている場合には、CMA 部品を開梱して、装置ラックの背面に持っていきます。

注 – ここでの手順で、「左」または「右」と述べる場合には、装置ラックの背面に向いていると想定してください。

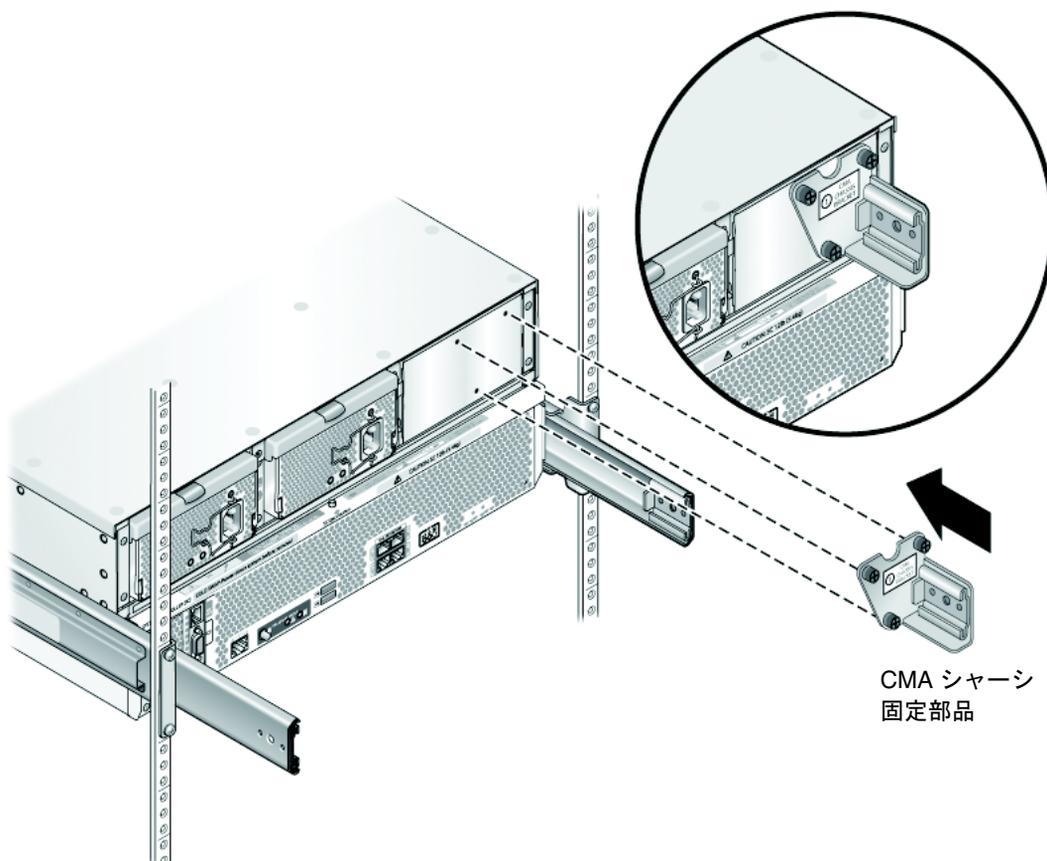
2. システムがラックに完全に取り付けられていない場合には、内部ストップに到達するまでシステムをスライドさせて、完全に取り付けます。
3. CMA シャーシ固定部品をシステムの右側に接続します。☒ 1-11 を参照してください。

プラスのねじ回し 2 番を使用して、3 つのネジをすべて締め付けます。

- a. CMA 固定部品の上部にある 2 つのネジを締め付けてから、下部のネジを締め付けます。
- b. すべてのネジを止まるまで回します (締め付けすぎないように注意してください)。

固定部品の取り付けが完了すると、CMA を取り付けることができます。

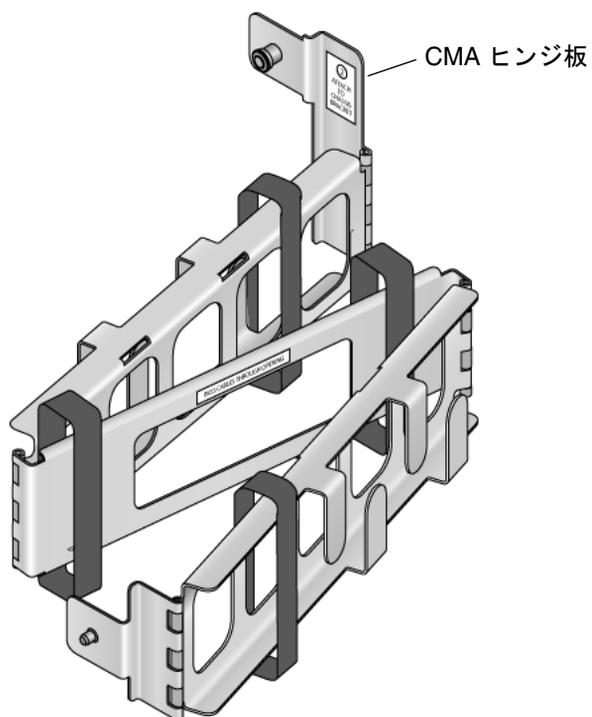
図 1-11 外部レール拡張部品の取り付け



CMA は、端がベルクロフラップの下に折り畳まれて押し込まれた状態で出荷されています。ベルクロフラップを開いて、CMA を展開します。CMA をラックに取り付ける際には、ある角度に折り畳まれた状態になります。図 1-12 を参照してください。

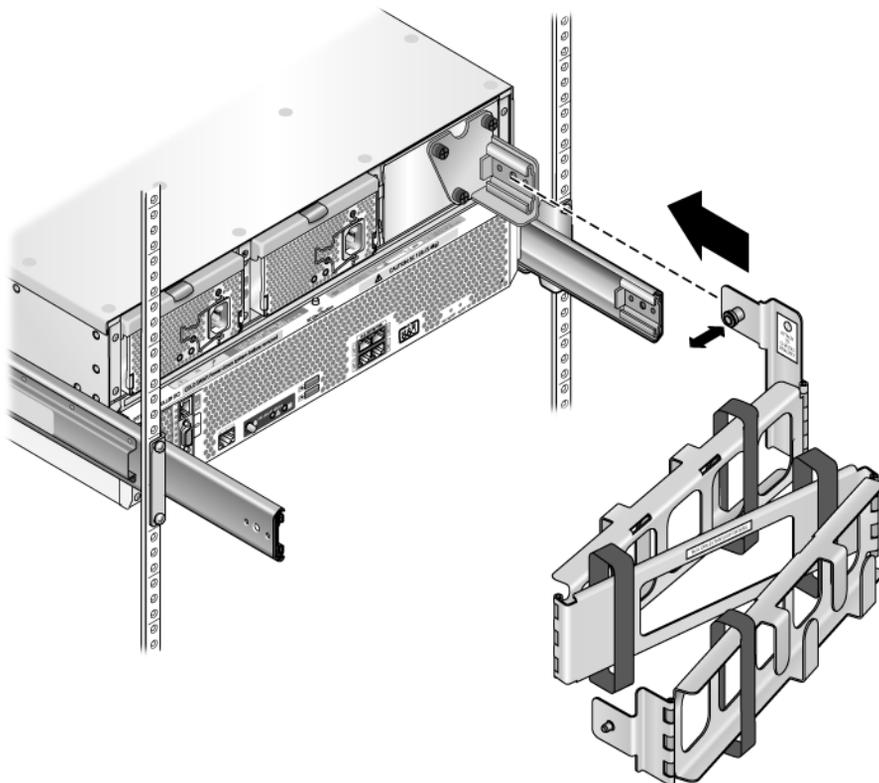
4. 図 1-12 のように CMA を折り畳みます。

図 1-12 CMA の折り畳み



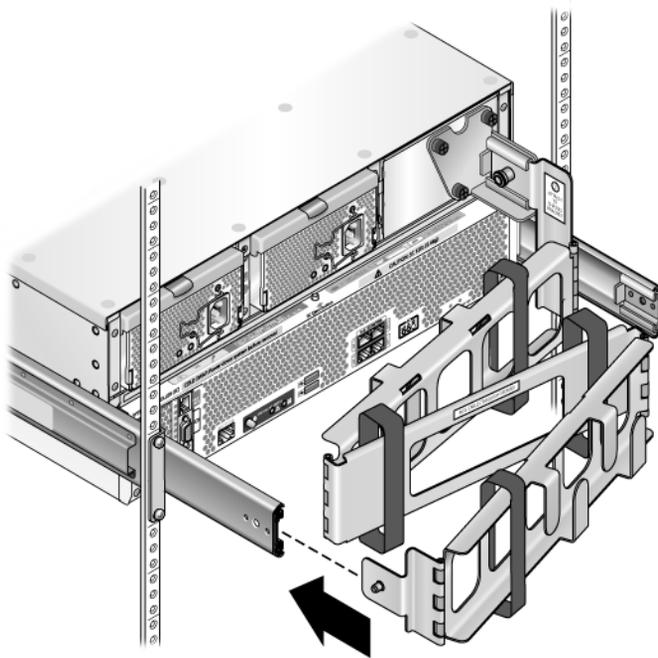
5. CMA ヒンジ板を CMA 固定部品に挿入します。(図 1-13 を参照)緑のばね付きのピンを外側に引き出し、(2 番とマークされた) ヒンジ板を CMA 固定部品にスライドさせ、ピンを離します。ヒンジプレートが CMA 固定部品に完全にはめ込まれていることを確認します。

図 1-13 右の CMA ヒンジ板の CMA 固定部品への挿入



6. (2番とマークされた) 左の CMA ヒンジ板を保持して、緑のばね付きのピンを外側に引き出し、ヒンジ板を左のスライドレールの端にスライドさせます(図 1-14 を参照)。ピンを離し、CMA がレールにしっかりと取り付けられていることを確認します。

図 1-14 左の CMA アームの左のレールへの取り付け



7. CMA 構成部品を開いて、U 形に引き出します。図 1-15を参照してください。
8. ケーブルを取り扱う前に、ベルクロストラップをすべて緩めます。
9. 必要に応じて、ケーブルをシステムに取り付け、CMA ケーブルハンガーを通してケーブルを配線します。両方の電源コードおよびすべてのデータケーブル (Ethernet ケーブルなど) は、CMA を通して配線する必要があります。

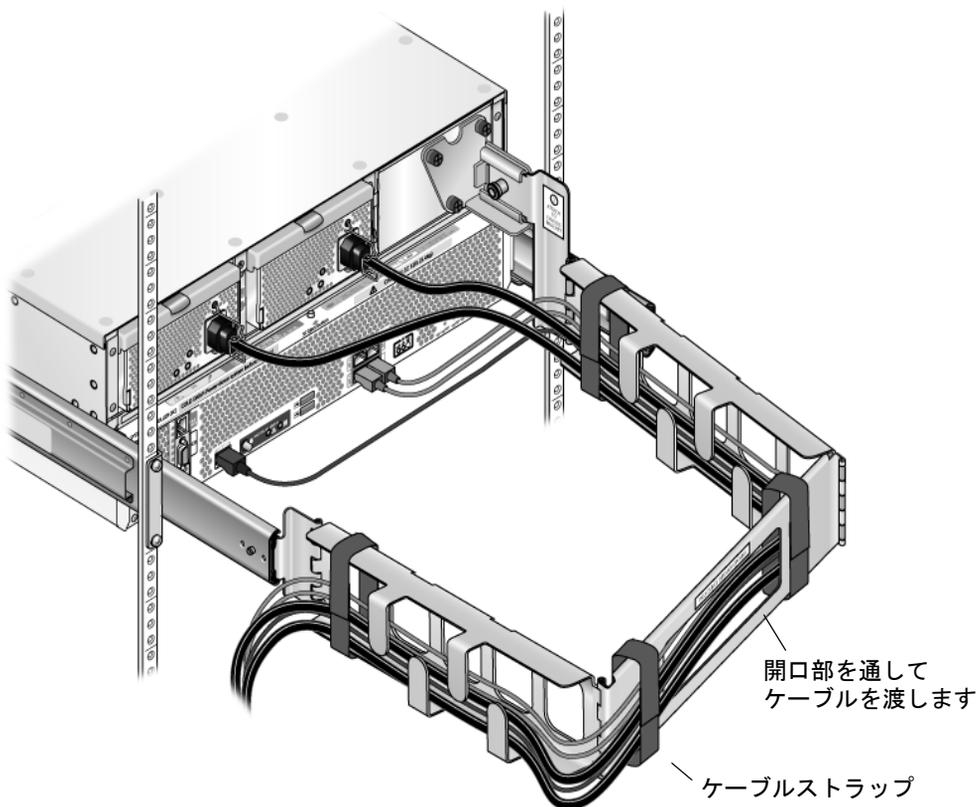
電氣的干渉を最小化するために、電源ケーブルを CMA の溝の下部に配置して、データケーブルを溝の上部にタイラップすることができます。

ケーブルを一番右側まで引き出して、CMA を入れます。これは、動作時に張力および保守ループを均衡化するために行います。



注意 – CMA には、少なくとも電源ケーブルが CMA を通してスレッド化されていなければ、フェールセーフ動作を行いません。CMA は、折りたたんでバインドすることができます。システムが前面から押す場合には、システムの背面が見えないため、CMA が損傷して修復できなくなる可能性があります。

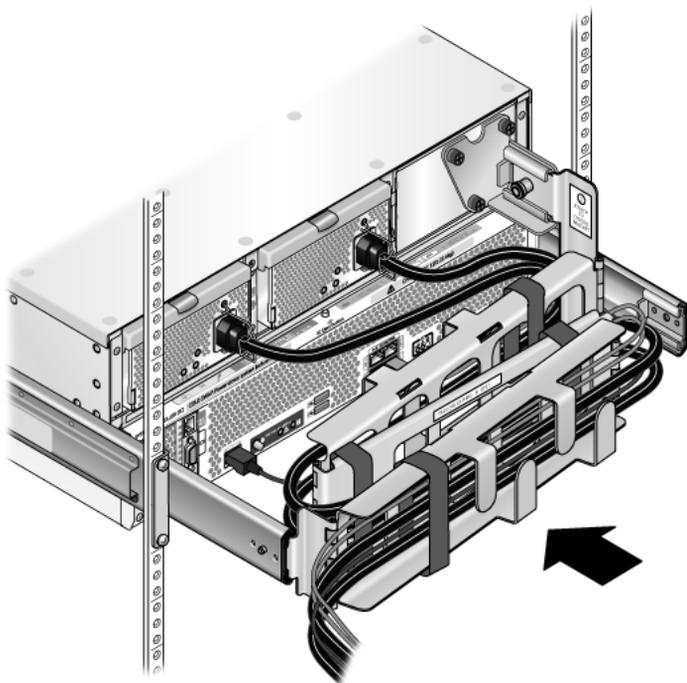
図 1-15 ストラップ付き CMA アームを通した配線パスの例



注 - 別のシステムのケーブルは CMA を通さないでください。システム 1 つにつき 1 つの CMA を使用してください。

10. 通路に出ないように、配線後に CMA アームを折り畳みます。図 1-16 を参照してください。

図 1-16 配線後の CMA アームの折り畳み



CMA の動作の確認

1. バインドまたはねじれがないか、接続されたケーブルを検査します。
2. CMA が展開されていて、スライドレールでバインドされていないことを確認します。
3. 各電源装置のクリップで、電源コードケーブルがシャーシに固定されていることを確認します。
4. ケーブルハンガーとCMA を必要に応じて調整してから、スライドレールおよびCMA の動作を再テストします。

ヒント - 通気を最大化するために、CMA の溝の下部およびこれらの溝の上部にあるデータケーブルで、電源コードをタイラップします。

CMA の取り外し

システムコントローラ (SC) にアクセスする必要がある場合は、まず CMA を取り外します。

1. システムから電源ケーブルおよびデータケーブルを抜きます。
2. 各ヒンジ板にある緑のピンを引き出し、CMA を背面まで引き出します。
SC モジュールの保守のためのみに取り外されている場合には、ケーブルは、CMA 内に留めて、吊るしたままにすることができます。

システムのラックからの取り外し

この手順では、サーバーの電源を切って、ケーブル管理アームを取り外し、サーバーの動作を制限するケーブルまたはコードをすべて取り外していることを想定しています。



注意 – 機械によるリフトを使用せずに、または 4 人未満でこの手順を行った場合、怪我または装置の損傷が発生する可能性があります。これらのシステムの重量は、コンポーネントがすべてロードされた状態で、160 ポンド (約 72.6 kg) です。怪我を防ぐために、機械によるリフトを使用して、システムをラックから取り外します。3 人しか作業できない場合には、システムを取り外す前に、電源装置、ハードディスク、およびシステムコントローラを取り外して、約 50 ポンドまで重量を減らします。ファントレイは取り付けられたままにします。

1. CMA およびすべてのケーブルを取り外します。
2. 機械によるリフトが利用できない場合は、ラックの背面から以下のコンポーネントを取り外して、重量を人手によるリフトでも安全なレベルに減らします。
 - 電源装置
 - システムコントローラ
3. システムが内部ロックおよびストップで停止するまで、完全に展開します。
4. 各側のラッチを使用して、システムを離します。
5. 機械によるリフトが使用できない場合は、ハードディスクドライブのアクセスカバーを開いて、ハードディスクドライブを取り外します。



注意 – 元の場所に戻せるように、必ずドライブにラベルを付けてください。

- システムをスライドレールから完全にスライドさせて、清潔で安定した表面に置きます。
- 中央レールが通路へのアクセスをブロックしないようにするため、内部ラッチで中央レールを離して、外部レールの内側に完全にスライドさせます。図 1-10 を参照してください。

注 - (44 インチ、つまり 1.12 メーターの幅未満の) 狭い通路のデータセンターにあるサーバーを取り外す場合は、Sun の保守担当部門に、狭い通路用取り外しキットを注文できます。

配線およびコネクタ

必要に応じて、ケーブルをサーバーの背面パネルコネクタに接続します。図 1-17 を参照してください。

図 1-17 Sun Fire X4500 サーバーの背面パネル

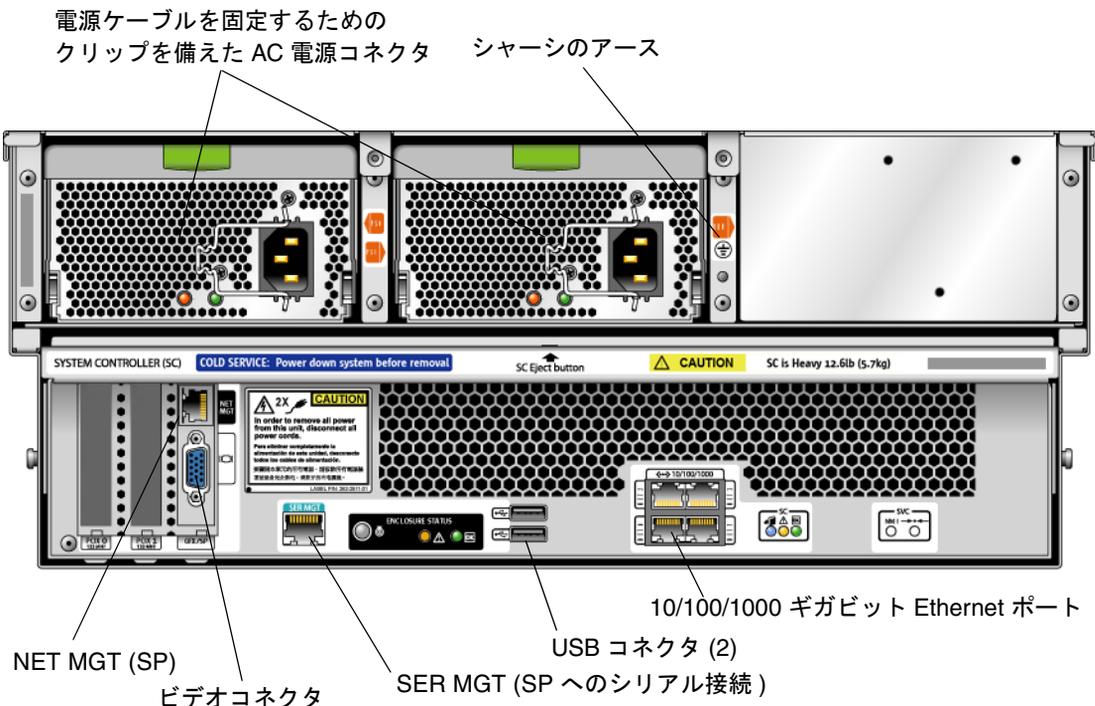
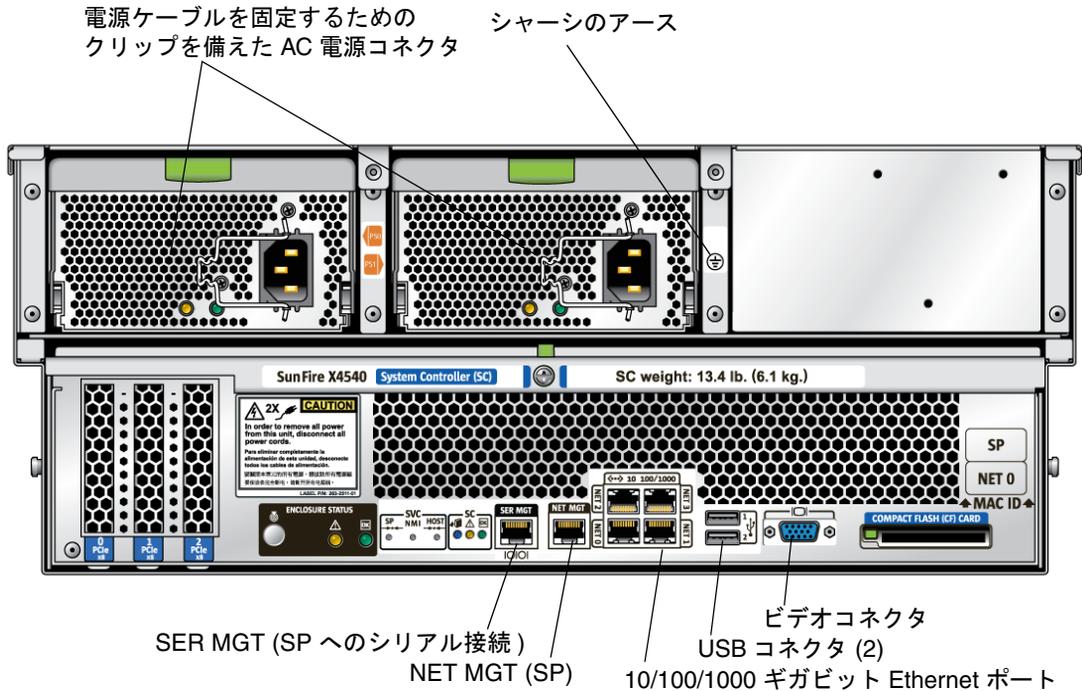


図 1-18 Sun Fire X4540 サーバーの背面パネル



1. 必要な場合は、USB キーボードケーブルを背面パネルにある USB コネクタまたは前面パネルに接続します。図 1-17 および図 1-20 を参照してください。

注 - オペレーティングシステム (OS) でヘッドレス動作がサポートされておらず (Solaris OS はサポートしていません)、システムコンソールで直接対話しようとしている場合は、キーボード、マウス、およびビデオモニターをそれぞれのコネクタに接続します。

2. (オプション) USB マウスケーブルを USB コネクタまたは前面パネルに接続します。図 1-20 を参照してください。
3. (オプション) ビデオモニターケーブルをビデオコネクタに接続します。
4. ギガビット Ethernet 用に必要に応じて、Ethernet ケーブルを NET コネクタに接続します。
 - NET 0 から NET 3 とラベル付けされたコネクタは、10/100/1000 ギガビット Ethernet ポートです。
5. ネットワークで Integrated Lights Out Manager (ILOM) にアクセスする場合は、ネットワークケーブルを NET MGT とラベル付けされた 10/100 Ethernet ポートに接続します。

- NET MGT とラベル付けされたポートは、システムを **Integrated Lights Out Manager (ILOM)** などの管理ネットワークに接続するために使用される 10/100 Ethernet ポートです。

注 – システムコンソールは、1024 x 768 の解像度および 24 ビットの発色数に永久に設定されており、変更できません。ILOM では、ビデオのリダイレクションをサポートするためには、この制限が必要です。

6. シリアル管理ポートを使用して ILOM のコマンド行インタフェースにアクセスする場合は、互換性のあるケーブルを **SER MGT** とラベル付けされた RJ-45 コネクタに接続します。

SER MGT ポートは、サービスプロセッサへのシリアル接続で、ILOM をサポートしています。

シリアルポートおよびシリアルポート配線について、以下の考慮事項を遵守してください。

- デフォルトシリアルポート速度は、フローコントロールなしで 9,600 ボーです。
- Sun Fire X4500/X4540 サーバーは、Sun Netra などの Sun Fire システムの RSC/ALOM/ALOM Plus カードの RJ-45 ポートと同じピン配列を使用しています。
- 互換性がある Sun RJ45 - DB9 アダプタ (部品番号 530-3100) が使用可能です。
- 代替の互換性のあるケーブルは、Cisco 72-3383-01 コンソールケーブルです。

7. [30 ページの「サーバーの電源の投入および切断」](#)に進んでください。

サーバーの電源の投入および切断

サーバーには 2 つのレベルの電源があります。スタンバイ電源と主電源です。サービスプロセッサ (SP) の初期設定では、スタンバイ電源を適用する必要があります。このセクションには、主電源モードで電源を入れる手順および主電源モードから停止する手順も記載されています。

▼ サービスプロセッサ (SP) の初期設定のためにスタンバイ電源を適用するには

初期設定前にスタンバイ電源を SP に適用するには、次の手順に従います。



注意 – すべてのファン、コンポーネントヒートシンク、空冷バッフル、およびカバーがインストールされていない場合には、サーバーを動作させないでください。十分な冷却機構がない状態でサーバーを動作させた場合、サーバーコンポーネントに重大な損害が生じる可能性があります。

1. アースされた AC 電源コードを、サーバーの背面パネルにある 2 つの AC 電源コネクタおよびアースされた AC (200 VAC から 240 VAC) 電源コンセントに接続します。

注 – このシステムは、220 VAC での動作用に出荷されています。3 番目の PSU を使用した 110 VAC での動作は、注文可能なオプションとしてご利用になれます。

2. アースされた AC 電源コードを、サーバーの背面パネルにある 2 つの AC 電源コネクタおよびアースされた AC (200 VAC から 240 VAC) 電源コンセントに接続した状態にします。

電源が接続されると、サーバーは、スタンバイ電源モードに入るまで、最大で 58 秒かかることがあります。スタンバイ電源モードでは、システムコントローラの前面パネルの電源/OK LED が点滅し、SP が動作していることが分かります。LED の場所については、[図 1-19](#) を参照してください。

3. [35 ページの「サービスプロセッサを使用した Sun Fire X4500/X4540 サーバーの設定」](#)の説明に従って、ソフトウェアの初期セットアップタスクを続行します。

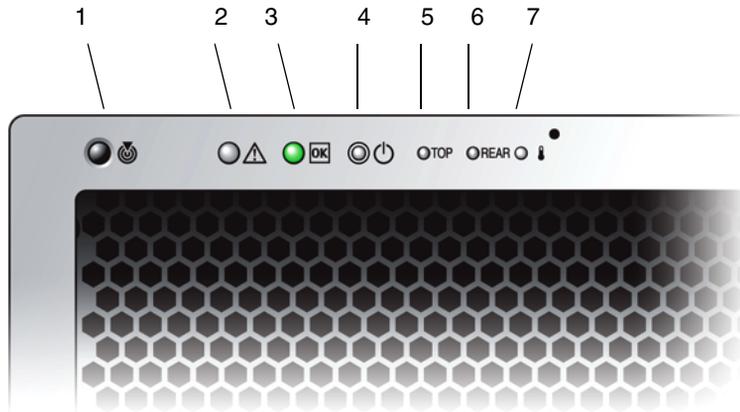
▼ 主電源モードに入るには

すべてのサーバーコンポーネントの主電源を入れるには、以下の手順に従います。

1. 電源コードが接続されていること、およびスタンバイ電源が入っていることを確認します。
スタンバイ電源モードでは、前面パネルの電源/OK LED (3) が点滅します。

図 1-19 Sun Fire X4500/X4540 サーバー電源ボタン

1. 位置特定ボタン /LED
2. システム障害 LED
3. 電源 /OK LED (システム電源)
4. 電源ボタン
5. 上部 (ハードディスクドライブまたはファン障害)
6. 背面 (電源装置またはシステムコントローラ障害)
7. システム温度異常警告

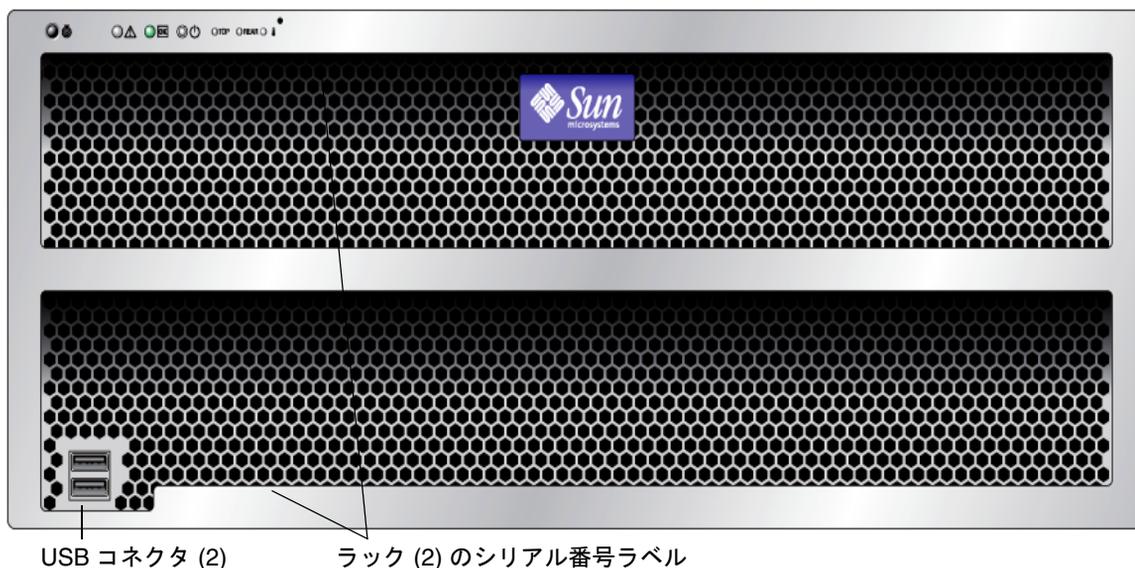


注 – ハードディスクドライブ、ファン、電源、およびシステムコントローラの LED の説明については、ハードディスクドライブのアクセスカバーにあるサービスラベルを参照してください。

2. 非導電ボールペンを使用して、サーバーの前面パネルにある埋め込み式の電源ボタンを押してから離します。図 1-19 を参照してください。

主電源がフルサーバーに適用されると、電源ボタンの隣にある電源/OK LED が点灯し、そのまま点灯しつづけます。

図 1-20 Sun Fire X4500/X4540 サーバーの前面パネル



▼ 主電源モードの停止

- 主電源モードからサーバーの電源を切る場合には、次の 2 つの方法のいずれかを使用します。

正常な停止：非導電ボールペンを使用して、前面パネルにある電源ボタンを押してから離します。これによって、Advanced Configuration and Power Interface (ACPI) 対応のオペレーティングシステムの場合は、オペレーティングシステムが正常に停止します。ACPI 対応のオペレーティングシステムを実行していないサーバーの場合は、即時にスタンバイ電源モードに移行します。

緊急の停止：電源ボタンを 4 秒間押しつけて、強制的に主電源を切って、スタンバイ電源モードに入ります。

主電源がオフの場合、前面パネルにある電源/OK LED が点滅をはじめ、サーバーがスタンバイ電源モードに入ったことが分かります。



注意 – サーバーの電源を完全に切る場合には、サーバーの背面にある電源から、AC 電源コードを抜く必要があります。

第2章

サービスプロセッサを使用した Sun Fire X4500/X4540 サーバーの設定

この章では、初期設定タスクを実行できるように、サーバーのサービスプロセッサ (SP) に接続する方法について説明します。SP は、サーバーの管理に使用できる Integrated Lights Out Manager (ILOM) ソフトウェアをサポートしています。

詳細については、以下の URL の ILOM ドキュメントを参照してください。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/sf.x4500>

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/sf.x4540>

Integrated Lights Out Manager (ILOM) の詳細については、以下の該当する ILOM ドキュメントを参照してください。

- 製品固有の ILOM 情報は、ご使用の製品の保守マニュアルまたはシステムの『Sun Fire X4500 および X4540 用 Sun Integrated Lights Out Manager の補足ドキュメント』に記載されています。
- システムにインストールされた ILOM のバージョン (1.0、1.1.1、2.0 など) をチェックしてください。その後、以下の該当するドキュメントを参照してください。
 - ILOM がバージョン 1.0 の場合は、『Integrated Lights Out Manager (ILOM) Administration Guide for ILOM 1.0』 (ILOM 1.0 用 Integrated Lights Out Manager (ILOM) 管理ガイド) を参照してください。
 - ILOM がバージョン 1.1.1 の場合は、『Integrated Lights Out Manager (ILOM) Administration Guide for ILOM 1.1.1』 (ILOM 1.1.1 用 Integrated Lights Out Manager (ILOM) 管理ガイド) を参照してください。
 - ILOM バージョンが 2.0 の場合は、『Sun Integrated Lights Out Manager 2.0 User's Guide』 (Sun Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド)、『Integrated Lights Out Manager 2.0 User's Guide』 (Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド) の付録、および『Sun Fire X4500 および X4540 用 Sun Integrated Lights Out Manager の補足ドキュメント』を参照してください。

この章では、以下の項目について説明します。

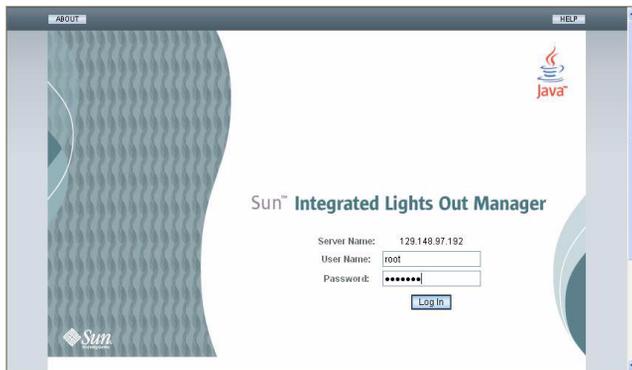
- 36 ページの「[Integrated Lights Out Manager ソフトウェアの概要](#)」
- 38 ページの「[ILOM サービスプロセッサへの接続](#)」
- 46 ページの「[ILOM コマンドリファレンス](#)」

注 – SP は、デフォルトでシステムにインストールされています。

Integrated Lights Out Manager ソフトウェアの概要

Sun Integrated Lights Out Manager (ILOM) ソフトウェアでは、Sun Fire X4500/X4540 サーバーを管理するための強力なツールを用意しています。

図 2-1 Integrated Lights Out Manager GUI ログインページ



ILOM は、4 つのコンポーネントで構成されています。そのうちの 3 つはホストサーバー上にあり、残りの 1 つはホストサーバーにアクセスするクライアントシステムで使用できます。

最初の 3 つのコンポーネントは以下のとおりです。

- **ILOM SP ハードウェア。** サーバーには、以下の機能を実行する ILOM ボードが搭載されています。
 - サーバーのフィールド交換可能なコンポーネント (ファン、ディスクドライブ、電源装置など) の状況および設定を監視します。
 - 外部端末またはローカルエリアネットワーク (LAN) へのシリアル接続および Ethernet 接続を提供します。

- **ILOM SP ファームウェア。** ILOM (GRASP for Sun Fire X4500) ボードにあらかじめインストールされたシステム管理ファームウェアアプリケーションライブラリ。この ILOM ファームウェアはオペレーティングシステムに依存しません。ファームウェアアプリケーションによって、システムに以下のシステム管理インタフェースが提供されます。
 - Web ベースのグラフィカルインタフェース
 - Secure Shell (SSH) コマンド行インタフェース
 - IPMI v2.0 コマンドインタフェース
 - Simple Network Management Protocol (SNMP) v1、v2c、v3 インタフェースこれらのインタフェースは、GRASP ボード上で、ベースとなる同じシステム管理機能呼び出しします。そのため、1 つ以上のこれらの ILOM インタフェースで作業するように選択して、データセンターで実行するほかの管理インタフェースと統合することができます。
- **遠隔コンソールアプリケーション。** このアプリケーションは、ビデオコネクタに直接接続されているかのようにホストサーバーのグラフィカルコンソールを遠隔クライアントで表示できるようにするレイヤーソフトウェアです。遠隔コンソールは、サーバーの VGA ビデオコネクタからの 1024x768 の出力のミラーです。遠隔キーボード、マウス、CD ドライブ、またはディスクドライブは、標準 USB デバイスとして表示されます。

注 – 遠隔コンソールアプリケーションは、ホストサーバーで実行されます。クライアントシステムでは、Web ブラウザおよび Sun Java™ ランタイム環境バージョン 5.0 以降が必要です。ご使用のクライアントシステム用の Java ランタイム環境は、無料で <http://java.sun.com> からダウンロードできます。

4 つ目の ILOM コンポーネントは以下のものです。

- **クライアントサイド Secure Shell (SSH) アプリケーション。** 遠隔 Secure Shell (SSH) を使用して ILOM SP にアクセスするには、遠隔クライアントシステム (サーバー、ワークステーション、ノートパソコン) に Secure Shell (SSH) 通信アプリケーションをインストールする必要があります。商用またはオープンソースの配布で、多くの Secure Shell (SSH) 通信アプリケーションが入手できます。オープンソースのクライアントサイド SSH アプリケーションについては、<http://www.openssh.org> を参照してください。

注 – Sun Microsystems は、現場でもっともよく使用されるデフォルト設定を反映するように、サーバーの ILOM ハードウェアおよびファームウェアを設定しています。これらのデフォルト値を変更する必要はあまりないでしょう。

ILOM サービスプロセッサへの接続

ILOM は、システムのシリアルポートまたは専用 Ethernet ポートを使用して通信します。

- シリアルポートに直接接続されたコマンド行インタフェース (CLI) を実行できます。
- Ethernet ポートでは、CLI および WebGUI を実行できます。

Ethernet で接続するには、いくつか設定する必要があります。

初期セットアップおよび設定を実行するために ILOM SP に接続する方法は 2 つあります。

- [38 ページの「シリアル接続を使用した ILOM への接続」](#)
- [40 ページの「Ethernet 接続を使用した ILOM への接続」](#)

シリアル接続を使用した ILOM への接続

端末または PC で実行している端末エミュレーションソフトウェアを ILOM ボードの RJ-45 シリアルポートに接続することによって、ILOM CLI にいつでもアクセスすることができます。

ILOM の初期設定を実行するために ILOM SP へのシリアル接続を確立するには、以下の手順を使用します。

注 – 以下の手順では、本書の第 1 章で説明したように、ハードウェア設定がすでに完了していて、スタンバイ電源をサーバーに適用していることを想定しています。

1. 端末、ノートパソコン、または端末サーバーが動作していることを確認します。
2. 端末デバイス、またはノートパソコンか PC で実行されている端末エミュレーションソフトウェアを以下のように設定します。
 - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー
 - ハードウェアのフローコントロール無効 (CTS/RTS)
 - ソフトウェアのフローコントロール無効 (XON/XOFF)

注 – サーバーの背面パネルにある RJ-45 SERIAL MGT ポートに取り付けられたシリアルケーブルを、端末デバイスに接続します。図 1-17 を参照してください。シリアルポートでは、接続されたシリアルケーブルが以下のピン配列を使用している必要があります。これらは、Sun Advanced Lights Out Manager (ALOM) または Remote System Control (RSC) のシリアルケーブルコネクタと同じであることに注意してください。表 2-1 を参照してください。

表 2-1 シリアル管理ポートのピン配列

ピン	信号の説明
1	送信要求 (RTS)
2	データ端末レディー (DTR)
3	送信データ (TXD)
4	アース
5	アース
6	受信データ (RXD)
7	データキャリア検出 (DCD)/データセットレディー (DSR)
8	送信可 (CTS)

3. 端末デバイスで Enter を押します。

これで、端末デバイスと ILOM 間の接続が確立されます。

注 – 電源を入れる前または電源投入処理中に端末またはエミュレータをシリアルポートに接続した場合、起動メッセージが表示されます。

システムが起動すると、以下のように、ILOM でログインプロンプトが表示されます。

```
SUNSPnnnnnnnnnn login:
```

プロンプトの最初の文字列はデフォルトのホスト名です。これは、接頭辞 SUNSP と ILOM の MAC アドレスから成ります。各 ILOM の MAC アドレスは一意です。

4. CLI にログインします。

- a. デフォルトのユーザー名を入力します: **root**
- b. デフォルトのパスワードを入力します: **changeme**

正常にログインすると、SP にデフォルトのコマンドプロンプトが以下のように表示されます。

```
->
```

ILOM は CLI にアクセスしています。CLI コマンドを実行できるようになりました。

たとえば、サーバーのマザーボードの状況情報を表示するには、以下のコマンドを入力します。

```
-> show /SYS/MB
```

ILOM コマンドを使用して、サーバーのユーザーアカウント、ネットワーク設定、アクセスリスト、アラートなどを設定します。CLI コマンドの詳細な操作方法については、『Integrated Lights Out Manager 2.0 User's Guide』(Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド) を参照してください。

5. ホストのシリアルコンソール (ホストの COM0) に移動するには、以下のコマンドを入力します。

```
cd /SP/console
```

```
-> start
```

注 – シリアルコンソールに戻ったあとで、CLI にスイッチバックするには、**Escape** と左括弧 [() キーをすばやく連続して押してください。

6. サーバーの設定後、51 ページの「あらかじめインストールされた Solaris オペレーティングシステムの設定」に進みます。

Ethernet 接続を使用した ILOM への接続

すべての ILOM 機能にアクセスするには、LAN を Ethernet ポートに接続して、Ethernet 接続を設定する必要があります。

ILOM は、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) および静的 IP アドレス指定をサポートしています。

- BIOS を使用して DHCP または静的 IP アドレスを設定するには、41 ページの「BIOS セットアップユーティリティを使用した IP アドレスの設定」を参照してください。
- DHCP を設定するには、42 ページの「DHCP を使用した ILOM の設定」を参照してください。
- 静的 IP アドレスを設定するには、43 ページの「静的 IP アドレスを使用した ILOM の設定」を参照してください。

BIOS セットアップユーティリティーを使用した IP アドレスの設定

BIOS 設定ユーティリティーによって、ILOM の IP アドレスを設定して、手動で設定するか、DHCP を使用することができます。

開始前のご注意

1. サーバーを開梱して、システム電源ケーブルを電源に接続します。
ハードウェアの取り付け、配線、電源投入の手順については、ご使用のプラットフォームのドキュメントを参照してください。
2. DHCP を使用する場合、DHCP サーバーが新しいメディアアクセス制御 (MAC) アドレスを受け入れるように設定されていることを確認します。

IP アドレスを設定するには

1. BIOS 設定ユーティリティーを起動します。
 - a. システムを起動します。
 - b. 起動メッセージが表示されたら、F2 を押して、BIOS セットアップに入ります。
いくつかメッセージが表示されて画面が変わった後に、BIOS セットアップユーティリティーが表示されます。
2. 「Advanced」タブを選択します。
Advanced ページが表示されます。
3. リストにある IPMI 2.0 Configuration を強調表示してから、Enter を選択します。
IPMI 2.0 Configuration ページが表示されます。
4. IPMI 2.0 Configuration ページにデータを入力します。
 - a. IP Assignment (IP 割り当て) で、DHCP または Static (静的) を選択します。
 - b. Static を選択した場合は、ページの下部に、IP アドレス、サブネットマスク、デフォルトゲートウェイを入力します。
5. Commit (コミット) を選択して、変更を保存します。
DHCP を選択した場合は、BIOS ユーティリティーによって自動的にアドレスフィールドが更新されます。



注意 – このページでの変更を保存するには、Commit (コミット) を使用する必要があります。F10 を押すと、変更は保存されません。

DHCP を使用した ILOM の設定

DHCP アドレスを使用するように ILOM を設定するには、以下の手順に従います。

1. DHCP サーバーが新しいメディアアクセス制御 (MAC) アドレスを受け入れるように設定されていることを確認します。
2. サーバーを開梱して、システム電源ケーブルを電源に接続します。
3. 以下のいずれかの場所から、サービスプロセッサの MAC アドレスを取得します。

MAC アドレスは、`xx:xx:xx:xx:xx:xx` 形式の 12 桁の 16 進数の数字列です。ここで、`x` は、16 進数の 1 文字 (0-9、A-F、a-f) です。あとから参照できるようにアドレスをメモに取ってください。

 - ILOM には、端末デバイスを接続できるシリアルポートが用意されています。ILOM にログインして、コマンド `show /SP/network` を入力すれば、現在の Mac アドレスが表示されます。
 - MAC アドレスは、システムコントローラのハンドルおよび GRASP ボードに貼られたラベルに記載されています。GRASP ボードのラベルを確認するには、サーバーのカバーを開ける必要があります。
 - MAC アドレスは、サーバーに標準装備されている Customer Information Sheet に記載されています。
 - システムの BIOS セットアップ画面で MAC アドレスを取得することができます。Advanced > IPMI 2.0 Configuration > Set LAN Configuration > MAC address を選択します。
 - コマンド行インタフェースで MAC アドレスを取得することができます。CLI で ILOM にログインして、コマンド `show /SP/network` を入力すると、MAC アドレスが表示されます。
4. Ethernet ケーブルを RJ-45 NET MGT Ethernet ポートに接続します。

[図 1-17](#) を参照してください。
5. Ethernet アドレスを直接割り当てるか、DHCP を使用して自動的に割り当てます。
 - a. お客様が Ethernet アドレスを割り当てる場合には、DHCP 設定ソフトウェアを使用して、ステップ 3 で記載の MAC アドレスに対応する IP アドレスを割り当てます。詳細については、DHCP サーバーのドキュメントを参照してください。
 - b. DHCP を使用して IP アドレスを自動的に割り当てるには、以下の手順に従います。

注 – 異なるオペレーティングシステムで実行されるさまざまな DHCP サーバーアプリケーションでは、ログファイルがそれぞれ異なる場所に格納されます。ログファイルの正しいパスについては、お客様の DHCP システム管理者にお問い合わせください。

Ethernet ケーブルを ILOM に接続すると、ILOM によって MAC アドレスが提供され、DHCP が ILOM に IP アドレスを割り当てます。

- i. DHCP サーバーにログインして、DHCP ログファイルを表示します。
- ii. ログファイル内で、ILOM MAC アドレスに対応する IP アドレスを特定します。

通常、DHCP ログファイルエントリは、以下のコンマ区切りのフィールドの独立行です。

ID、日付、時間、説明、IP アドレス、ホスト名、MAC アドレス

正しい DHCP ファイルエントリの MAC アドレス (7 番目の) フィールドで、ILOM の MAC アドレスを見つけて、IP アドレス (5 番目の) フィールドの対応する値を記録します。これが、WebGUI および遠隔コンソールにアクセスするために使用する必要がある IP アドレスです。

この手順が完了すると、DHCP が割り当てた IP アドレスを使用して ILOM にアクセスできます。

静的 IP アドレスを使用した ILOM の設定

通常、[42 ページ](#)の「[DHCP を使用した ILOM の設定](#)」で説明したように、DHCP を使用するように ILOM を設定します。

静的 IP アドレスを使用して ILOM を設定する場合は、以下のいずれかの方法を使用します。

- [41 ページ](#)の「[BIOS セットアップユーティリティを使用した IP アドレスの設定](#)」
- [44 ページ](#)の「[CLI およびシリアル接続を使用した静的 IP アドレスの設定](#)」
- [45 ページ](#)の「[CLI および Ethernet を使用した静的 IP アドレスの設定](#)」
- [45 ページ](#)の「[Web インタフェースを使用した静的 IP アドレスの設定](#)」

開始前のご注意

1. サーバーを開梱して、システム電源ケーブルを電源に接続します。
2. 以下のいずれかの場所から、ILOM の IP アドレスを取得します。後から参照できるように IP アドレスを記録します。

- コマンド行インタフェース。CLI で ILOM にログインして、コマンド `show /SP/network` を入力すると、IP アドレスが表示されます。
- システムの BIOS 設定画面。Advanced -> IPMI 2.0 Configuration を選択します。LAN Configuration で IP Address (IP アドレス) を確認します。

注 – BIOS 設定ユーティリティーの IPMI 2.0 Configuration ページで、IP アドレスを設定することができます。表示されているアドレスをそのまま受け入れることができる場合には、変更する必要はありません。IP アドレスを変更するには、IP Address フィールドに新しいアドレスを入力してから、Commit をクリックします。詳細は、[41 ページの「BIOS セットアップユーティリティーを使用した IP アドレスの設定」](#)を参照してください。

CLI およびシリアル接続を使用した静的 IP アドレスの設定

CLI およびシリアルライン接続を使用して ILOM に静的 IP アドレスを設定するには、以下の手順に従います。

1. ILOM へのシリアル接続を確立します。

詳細は、[38 ページの「シリアル接続を使用した ILOM への接続」](#)を参照してください。

2. ILOM にログインします。

3. 以下のコマンドを入力して、作業用ディレクトリを設定します。

```
cd /SP/network
```

4. 以下のコマンドを入力して静的 Ethernet を指定します。

注 – 以下の値は単なる例です。ご使用の ILOM およびネットワーク設定に適した IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイを指定する必要があります。

```
set pendingipaddress=129.144.82.26
set pendingipnetmask=255.255.255.0
set pendingipgateway=129.144.82.254
set commitpending=true
```

5. ILOM からログアウトします。

CLI および Ethernet を使用した静的 IP アドレスの設定

1. ネットワークを介して Secure Shell (SSH) を使用するか、端末をシリアルポートに接続して、ILOM にログインします。

CLI への SSH を確立するには、SSH アプリケーションで適切な接続コマンドを入力します。たとえば、IP アドレス 129.144.82.20 を使用して SP に接続するには、次のコマンドを入力します。

```
# ssh -l root 129.144.82.20
```

[43 ページの「開始前のご注意」](#) で取得した IP アドレスを使用してください。

2. 以下のコマンドを入力して、作業用ディレクトリを設定します。

```
cd /SP/network
```

3. 以下のコマンドを入力して静的 Ethernet を指定します。

注 – 以下の値は単なる例です。ご使用の ILOM およびネットワーク設定に適した IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイを指定する必要があります。

```
set pendingipaddress=129.144.82.26
set pendingipnetmask=255.255.255.0
set pendingipgateway=129.144.82.254
set pendingipdiscovery=static
set commitpending=true
```

Web インタフェースを使用した静的 IP アドレスの設定

WebGUI を使用して ILOM に静的 IP アドレスを設定するには、以下の手順に従います。GUI など、すべての ILOM 機能にアクセスするには、LAN を Ethernet ポートに接続して、Ethernet 接続を設定します。

1. 遠隔システムで実行している Web ブラウザを使用して ILOM に接続します。

[43 ページの「開始前のご注意」](#) で取得した IP アドレスを使用してください。

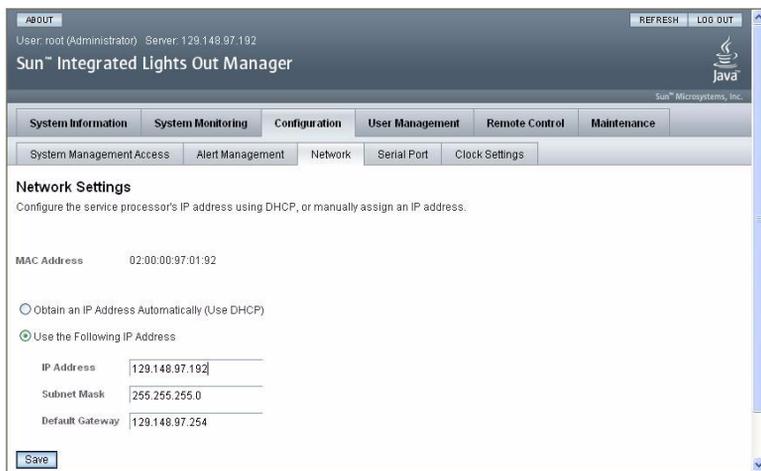
2. WebGUI にログインします。

デフォルトのユーザー名は **root**、デフォルトのパスワードは **changeme** です。

3. Configuration (設定) タブおよびその中の Network (ネットワーク) タブを選択して、現在の ILOM ネットワーク設定の情報を表示します。[図 2-2](#) を参照してください。

4. Use the Following IP Address (以下の IP アドレスを使用) オプションをクリックします。[図 2-2](#)を参照してください。

図 2-2 Integrated Lights Out Manager のネットワーク設定ページ



5. 必要に応じて表示された設定を変更して、Save (保存) をクリックします。

ILOM は、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) および静的 IP アドレス指定をサポートしています。

- DHCP を使用して ILOM を設定するには、[42 ページの「DHCP を使用した ILOM の設定」](#)を参照してください。
- 静的 IP アドレスを設定するには、[43 ページの「静的 IP アドレスを使用した ILOM の設定」](#)を参照してください。

ILOM コマンドリファレンス

以下の表は、SP の管理に使用できる ILOM コマンドを要約したものです。ILOM コマンドの詳細については、以下の表および『ILOM User's Guide』(ILOM ユーザーズガイド)を参照してください。

表 2-2 ILOM コマンドの例

説明	コマンド
ユーザーコマンド	
ローカルユーザーを追加します。	<code>create /SP/users/user1 password=password role=administrator operator</code>
ローカルユーザーを削除します。	<code>delete /SP/users/user1</code>

表 2-2 ILOM コマンドの例 (続き)

説明	コマンド
ローカルユーザーのプロパティを変更します。	<code>set /SP/users/user1 role=operator</code>
すべてのローカルユーザーの情報を表示します。	<code>show -display [targets properties all] -level [value all] /SP/users</code>
LDAP 設定の情報を表示します。	<code>show /SP/clients/ldap</code>
LDAP 設定を変更します。	<code>set /SP/clients/ldap binddn=proxyuser bindpw=proxyuserpassword defaultrole=administrator operator ipaddress=ipaddress</code>
ネットワークおよびシリアルポート設定コマンド	
ネットワーク設定情報を表示します。	<code>show /SP/network</code>
ILOM のネットワークプロパティを変更します。一部のネットワークプロパティ (IP アドレスなど) を変更すると、アクティブなセッションが切断されます。	<code>set /SP/network pendingipaddress=ipaddress pendingipdiscovery=dhcp static pendingipgateway=ipgateway pendingipnetmask=ipnetmask commitpending=true</code>
外部シリアルポートの情報を表示します。	<code>show /SP/serial/external</code>
外部シリアルポート設定を変更します。	<code>set /SP/serial/external pendingspeed=integer commitpending=true</code>
ホストへのシリアル接続の情報を表示します。	<code>show /SP/serial/host</code>
ホストのシリアルポート設定を変更します。	<code>set /SP/serial/host pendingspeed=integer commitpending=true</code>
注: この速度設定は、ホストのオペレーティングシステムのシリアルポート 0、COM1、または /dev/ttyS0 の速度設定と一致している必要があります。	
アラートに関するコマンド	
PET アラートの情報を表示します。最大で 15 のアラートを設定できます。	<code>show /SP/alert/rules/1...15</code>
アラート設定を変更します。	<code>set /SP/alert/rules/1...15 destination=ipaddress level=down critical major minor</code>
システム管理アクセスに関するコマンド	
HTTP 設定の情報を表示します。	<code>show /SP/services/http</code>

表 2-2 ILOM コマンドの例 (続き)

説明	コマンド
HTTPS への自動リダイレクションを有効化するなど、HTTP 設定を変更します。	set /SP/services/http port=portnumber secureredirect enabled disabled servicestate=enabled disabled
HTTPS アクセスの情報を表示します。	show /SP/services/https
HTTPS 設定を変更します。	set /SP/services/https port=portnumber servicestate=enabled disabled
SSH DSA 鍵の設定を表示します。	show /SP/services/ssh/keys/dsa
SSH RSA 鍵の設定を表示します。	show /SP/services/ssh/keys/rsa
SNMP に関するコマンド	
SNMP 設定の情報を表示します。デフォルトでは、SNMP ポートは 161 で、v3 が有効化されています。	show /SP/services/snmp engineid=snmpengineid port=snmpportnumber sets=enabled disabled v1=enabled disabled v2c=enabled disabled v3=enabled disabled
SNMP ユーザーを表示します。	show /SP/services/snmp/users
SNMP ユーザーを追加します。	create /SP/services/snmp/users/snmpusername authenticationpassword=password authenticationprotocol=MD5 SHA permissions=rw ro privacypassword=password privacyprotocol=none DES
SNMP ユーザーを削除します。	delete /SP/services/snmp/users/snmpusername
SNMP パブリック (読み取り専用) コミュニティーの情報を表示します。	show /SP/services/snmp/communities/public
このデバイスを SNMP パブリック コミュニティーに追加します。	create /SP/services/snmp/communities/ public/comm1
このデバイスを SNMP パブリック コミュニティーから削除します。	delete /SP/services/snmp/communities/ public/comm1
SNMP プライベート (読み書き) コミュニティーの情報を表示します。	show /SP/services/snmp/communities/private
このデバイスを SNMP プライベート コミュニティーに追加します。	create /SP/services/snmp/communities/ private/comm2
ホストシステムに関するコマンド	
このデバイスを SNMP プライベート コミュニティーから削除します。	delete /SP/services/snmp/communities/ private/comm2
ホストシステムを起動します。	start /SYS
ホストシステムを停止します。	stop /SYS

表 2-2 ILOM コマンドの例 (続き)

説明	コマンド
ホストシステムをリセットします。	<code>reset /SYS</code>
ホストコンソールに接続するセッションを開始します。	<code>start /SP/console</code>
ホストコンソールに接続されたセッションを停止します。	<code>stop /SP/console</code>
クロックの設定	
プライマリ NTP サーバーと同期化するように ILOM クロックを設定します。	<code>set /SP/clients/ntp/server/1 address=ntpIPAddress</code>
セカンダリ NTP サーバーと同期化するように ILOM クロックを設定します。	<code>set /SP/clients/ntp/server/2 address=ntpIPAddress2</code>

第3章

あらかじめインストールされた Solaris オペレーティングシステムの設定

本章では、Sun Fire X4500/X4540 サーバーにあらかじめインストールされている Solaris オペレーティングシステム (OS) を設定するステップを説明します。Sun Fire X4540 サーバーには、Solaris 10 4/08 が必要です。

注 – SPARC® システムとは異なり、サーバーに電源を入れた際にあらかじめインストールされた Solaris 10 のイメージの出力はほとんど表示されません。BIOS 電源投入時自己診断 (POST) などの起動情報の出力は表示されます。以下のセクションで説明するように、インストールプロセスを表示するオプションがあります。

63 ページの「コンソールの出力をルートデバイス、ルートミラー、または VGA にリダイレクトするには」。デフォルトでは、コンソールはシリアルポートにリダイレクトされます。詳細については、65 ページの「端末プログラムを使用してサーバーに接続するには」を参照してください。

この章では、以下の項目について説明します。

- 52 ページの「開始前のご注意」
- 52 ページの「インストールワークシートの情報の収集」
- 56 ページの「Solaris OS インストールおよびブート可能なハードディスクドライブの重要なガイドライン」
- 60 ページの「あらかじめインストールされた Solaris オペレーティングシステムの設定」
- 67 ページの「Solaris インストールプログラムの使用」
- 69 ページの「インストール後」
- 70 ページの「Solaris オペレーティングシステムの再インストール」
- 71 ページの「他のオペレーティングシステムのインストール」

開始前のご注意

あらかじめインストールされた OS の設定を開始する前に、以下を実行します。

- 35 ページの「サービスプロセッサを使用した Sun Fire X4500/X4540 サーバーの設定」で説明されているように、サーバーの Integrated Lights Out Manager (ILOM) サービスプロセッサ (SP) の初期設定を実行して、サーバーのネットワーク設定を決定します。
- 52 ページの「インストールワークシートの情報の収集」にリストされている、設定に必要な情報を収集します。デフォルト値はアスタリスク (*) で示されていることに注意してください。

インストールワークシートの情報の収集

表 3-1 のワークシートを使用して、あらかじめインストールされた Solaris OS を設定するために必要な情報を収集します。

表 3-1 インストール用ワークシート

インストール用の情報	説明または例	回答： デフォルト (*)
言語	Solaris 10 ソフトウェアで使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用する端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムがネットワークに接続されているかどうか。	<ul style="list-style-type: none">ネットワークに接続されているネットワークに接続されていない*
DHCP	システムで動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用してネットワークインタフェースを設定できるかどうか。	<ul style="list-style-type: none">はいいいえ*

表 3-1 インストール用ワークシート (続き)

インストール用の情報	説明または例	回答： デフォルト (*)	
DHCP を使用しない場合には、ネットワークアドレスを記入します：	IP アドレス	DHCP を使用しない場合は、システムの IP アドレスを入力します。 例：129.200.9.1	
	サブネット	DHCP を使用しない場合、システムはサブネットの一部かどうか。 そうである場合、サブネットのネットマスクを入力します。 例：255.255.0.0	255.255.0.0*
	IPv6	このマシンで Ipv6 を有効にするかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> • はい • いいえ*
ホスト名	システムで選択するホスト名。		
Kerberos	<p>このマシンで Kerberos セキュリティーを有効にするかどうか。</p> <p>「はい」の場合、以下の情報を収集します。</p> <p style="text-align: right;">デフォルトレルム：</p> <p style="text-align: right;">管理サーバー：</p> <p style="text-align: right;">最初の KDC：</p> <p style="text-align: right;">(オプション) 追加の KDC：</p>		<ul style="list-style-type: none"> • はい • いいえ*

表 3-1 インストール用ワークシート (続き)

インストール用の情報	説明または例	回答： デフォルト (*)
ネームサービス	ネームサービス	該当する場合、このシステムでどのネームサービスを使用するかを入力します。
		<ul style="list-style-type: none"> • NIS+ • NIS • DNS • LDAP • なし*
	ドメイン名	システムが所属するドメインの名前を入力します。
	NIS+ および NIS	ネームサーバーを指定するか、それともインストールプログラムに自動検出させるかを指定します。
		<ul style="list-style-type: none"> • 自分で指定する • システムに自動検出させる*
	DNS	DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 つ以上の IP アドレスを入力する必要があります。最大で 3 つのアドレスを入力できます。
		また、DNS クエリーを行う際に検索するドメインのリストを入力することもできます。
		検索ドメイン：
		検索ドメイン：
		検索ドメイン：
	LDAP	LDAP プロファイルに関する以下の情報を入力します。
		プロファイル名：
		プロファイルサーバー：
		LDAP プロファイルにプロキシ資格レベルを指定する場合には、以下の情報を収集します。
		プロキシバインド識別名：
		プロキシバインドパスワード：

表 3-1 インストール用ワークシート (続き)

インストール用の情報	説明または例	回答： デフォルト (*)
デフォルトルート	<p>デフォルトルート IP アドレスを指定するか、Solaris インストールプログラムに自動検出させるか。</p> <p>デフォルトルートは、2 つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。</p> <p>以下の中から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IP アドレスを指定することができます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムを再起動すると、指定された IP アドレスがデフォルトルートになります。 • Solaris インストールプログラムに IP アドレスを自動検出させることができます。ただし、システムは、インターネット制御メッセージプロトコル (ICMP) ルーター検索プロトコルを使用して自身を通知するルーターを持つサブネット上にある必要があります。コマンド行インタフェースを使用する場合、システムの起動時にソフトウェアが IP アドレスを検出します。 • ルーターがない場合、またはここでソフトウェアによって IP アドレスを検出させない場合は、「なし」を選択することができます。再起動時にソフトウェアは、自動的に IP アドレスを検出しようとします。 	<ul style="list-style-type: none"> • 指定する • 検出する • なし*
時間帯	デフォルトの時間帯を指定する方法を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> • 地理的地域* • GM からの時差 • 時間帯ファイル
ルートパスワード	システムのルートパスワードを選択します。	

IO ボードおよび SP の MAC アドレスの検出

IO ボードおよび SP の MAC アドレスは、それぞれの PC ボードに印刷されていますが、システムコントローラハンドルにも印刷されています。

- SP の MAC アドレスは、ハンドルの左側にあります。「SP MAC ID」と記載されたラベルを探してください。
- IO ボードの MAC アドレスは、ハンドルの右側にあります。「Net 0 MAC ID」と記載されたラベルを探してください。

注 - ケーブル管理アーム (CMA) が取り付けられている場合には、アドレスが見えない場合があります。CMA が取り付けられている場合に MAC アドレスのラベルを見るには、ボールペンを使用して、埋め込み式のボタンを押して、システムコントローラハンドルをリリースし、アドレスが見えるようになるまである程度回転させます。終了後は閉じ位置に戻します。

Solaris OS インストールおよびブート可能なハードディスクドライブの重要なガイドライン

Sun Fire X4500/X4540 サーバーに Solaris OS をインストールする際は、以下の重要なガイドラインに注意してください。

ブート可能ディスクのコントローラ番号は、サーバーの設定によって異なります。例えば、ブート可能ディスクのコントローラ番号は、以下に基づいてインストール時に設定されます。

- インストールされているディスクの数
- 外部 USB ディスクまたは CD デバイス (SP によってサポートされている仮想 CD-ROM および仮想フロッピーデバイスを含む) の存在

このため、インストール手順の**実行時**にブート可能ディスクを特定する必要があります。

Sun Fire X4500

Sun Fire X4500 サーバーには、6 個のコントローラが付属しており、それぞれ最大で 8 個の SATA ドライブをサポートしています (合計で 48 個の SATA ドライブ)。Solaris OS の再インストール前に、2 つのブート可能ディスクに対応する論理デバイス名 (以下の形式) を判定する必要があります。

cXtYdZsW

ここで、

- cX は、コントローラ (またはインタフェース) の番号です (c0、c2、c4 など)。コントローラ番号は、順番に論理的に割り当てられます。
- tY は、デバイスのターゲット ID です (t0、t1、t2、…、t7)。
- dZ は、デバイス番号 (LUN) です。デバイス装置の実際のアドレスを反映したものです。Z は、Solaris 10 OS の場合はゼロ (0) です。

- `sW` は、ディスクのスライスを表す、スライス番号です。有効な数字は、0 から 7 です。

Sun Fire X4540

Sun Fire X4540 サーバーには、6 個のコントローラが付属しており、それぞれ最大で 8 個の SATA ドライブをサポートしています (合計で 48 個の SATA ドライブ)。Solaris OS の再インストール前に、2 つのブート可能ディスクに対応する論理デバイス名 (以下の形式) を確認する必要があります。

`cXtYdZsW`

注 – コンパクトフラッシュ (CF) ストレージは、SATA ドライブの数に影響を与えません。そのため、SATA の番号が変わる可能性があります。

ここで、

- `cX` は、コントローラ (またはインタフェース) の番号です (`c0`、`c2`、`c4` など)。コントローラ番号は、順番に論理的に割り当てられます。
- `tY` は、デバイスのターゲット ID です (`t0`、`t1`、`t2`、…、`t7`)。
- `dZ` は、デバイス番号 (LUN) です。デバイス装置の実際のアドレスを反映したものです。Z は、Solaris 10 OS の場合はゼロ (0) です。
- `sW` は、ディスクのスライスを表す、スライス番号です。有効な数字は、0 から 7 です。

ブート可能ディスクを判定するには、以下で説明する、コマンド `cfgadm` を使用します。`cfgadm` コマンドは、動的に再設定可能なハードウェアリソースの設定管理操作を提供します。このコマンドの詳細については、`man` ページを参照してください。

▼ ブート可能ディスクを判定して Solaris OS を再インストールするには

この手順では、Solaris インストールプログラムを実行して、Solaris 10 オペレーティングシステムを再インストールすることを想定しています。

1. Solaris インストールプログラムで、インストールタイプを選択します。
Solaris インストールプログラムで、以下のような画面が表示されます。

Select the type of installation you want to perform:

- 1 Solaris Interactive
- 2 Custom JumpStart
- 3 Solaris Interactive Text (Desktop session)
- 4 Solaris Interactive Text (Console session)
- 5 Apply driver updates
- 6 Single user shell

Enter the number of your choice followed by the <ENTER> key.

Alternatively, enter custom boot arguments directly.

If you wait 30 seconds without typing anything,

an interactive installation will be started.

- a. インストールタイプとして、オプション 1 または 3 を選択します。これらのオプションを使用すれば、インストールプログラムの実行中に端末ウィンドウを開くことができます。[手順 4](#) で端末ウィンドウを開く必要があります。
 - b. または、4 Console session (コンソールセッション) を選択することもできます。この場合、システム完了の確認後にインストールを終了させ、ステップ 4 のコマンドを入力し、suninstall コマンドを使用してインストールを再開します。
2. [52 ページ](#)の「[インストールワークシートの情報の収集](#)」で収集した情報を援用して、プロンプトが出された場合にシステムおよびネットワークの情報を入力します。
 3. 実行するインストールのタイプを求められたら、Next (次へ) をクリックします。
 4. ブート可能ディスクの論理ディスク名を検索します。
 - a. マウスを右クリックして、オプション Program (プログラム) > Terminal (端末) を選択して、端末ウィンドウを開きます。
 - b. 以下を入力することによって、オペレーティングシステムをインストールするブート可能ディスクを判定します。

```
# cfgadm -al
```

このコマンドによって、すべてのディスクがリストされます。最初の 2 つのコントローラチャンネルでリストされた最初の 2 つのディスクが、サーバーのブート可能ディスクです。

5. インストールプログラムに戻って、Solaris OS をインストールするブート可能ディスクに対応する論理ディスク名を選択します。

この例では、物理スロット 0 番のブート可能ディスクの論理ディスク名は c4t0d0 です。

注 – ディスクがブート可能ディスクドライブではないというメッセージが表示されることがあります。このメッセージは無視して、続行してください。

- a. 上下矢印キーを使用して、ステップ 4 で判定したブート可能ディスクを選択してから、F2 を押して続行します。
 - b. 選択したディスクに Windows または Linux のパーティションが含まれている場合には、Windows または Linux のパーティションと共存できる Solaris のパーティションを作成する必要があります。これを行うには、プロンプトに従って、Solaris OS インストールを保持する Solaris fdisk パーティションを作成します。
6. 製品ダウンロードサイトの説明どおりに、必要なパッチの最新バージョンをインストールします。製品ダウンロードサイトにアクセスするには、次の Web サイトに移動して「Downloads」セクションを探してください。

<http://www.sun.com/servers/x64/x4500/support.xml>

Solaris OS トレーニング

Sun は、ユーザーの個人的スケジュールおよび学習スタイルに適応した、柔軟なトレーニングオプションを提供しています。トレーニングオプションには、インストラクターによるクラス、Web ベースのオンラインのクラス、CD-ROM によるクラス、および仮想ライブクラスがあります。Solaris 10 のトレーニングオプションおよび認定オプションの概要については、以下にアクセスしてください。

<http://www.sun.com/training/catalog/solaris10.html>

あらかじめインストールされた Solaris オペレーティングシステムの設定

Solaris 10 オペレーティングシステムは、スロット 0 のハードディスクドライブにあらかじめインストールされており、スロット 8 にミラーリングされています。このあらかじめインストールされた OS を設定するには、[52 ページの「インストールワークシートの情報の収集」](#) で収集した情報を使用してください。

以下で説明されているように、サービスプロセッサの CLI に接続して、システムコンソールにアクセスすることができます。

- [60 ページの「サービスプロセッサの CLI に接続するには」](#)

以下のように、コンソールの出力はリダイレクトできます。

- [62 ページの「コンソールの出力をビデオポートにリダイレクトするには」](#)
- [63 ページの「コンソールの出力をルートデバイス、ルートミラー、または VGA にリダイレクトするには」](#)

以下のように、別のシステムを使用してサーバーに接続することによって、あらかじめインストールされた Solaris OS を設定することができます。

- [63 ページの「サービスプロセッサの IP アドレスを使用してサーバーに接続するには」](#)
- [65 ページの「端末プログラムを使用してサーバーに接続するには」](#)
- [66 ページの「シリアルキャプチャプログラムを使用してサーバーに接続するには」](#)

▼ サービスプロセッサの CLI に接続するには

この手順では、サービスプロセッサの CLI に接続して、システムコンソールにアクセスします。以下の 2 つの方法でこれを行うことができます。

- クライアントシステムで SSH を実行する (方法 1)。
- シリアルケーブルをサーバーに直接接続する (方法 2)。

注 – システムコンソール画面は、システムの電源が入るまで空白のままです。

開始前のご注意

SSH (方法 1) を使用する場合は、以下の条件が満たされている必要があります。

- システムのシリアルポートの通信プロパティが以下のように設定されている必要があります。9600 ボー、8N1 (データビット 8、パリティなし、ストップビット 1)、フローコントロール無効。
- サービスプロセッサに接続された NET MGT ポートと同じサブネットへの Ethernet 接続がある必要があります。
- サービスプロセッサの IP アドレスがわかっている必要があります。

これらの条件が満たされていない場合には、シリアルケーブル (方法 2) を使用してください。

詳細については、『Sun Integrated Lights Out Manager 2.0 User's Guide』(Sun Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド) を参照してください。

▼ SSH またはシリアルケーブルを使用してサービスプロセッサに接続するには

1. 以下のいずれかの方法を使用して、サービスプロセッサに接続します。

方法 1 : SSH を使用して接続するには、以下の手順に従います。

- a. SSH クライアントを開きます。
- b. 以下のコマンドを入力します。

```
-> ssh -l root <sp_ip_address>
```

サービスプロセッサでログインプロンプトが表示されます。

方法 2 : シリアルケーブルおよび端末キャプチャプログラムを使用して接続するには、以下の手順に従います。

- a. ケーブルを使用してサーバーのシリアルポートとシリアルキャプチャホストシステムのシリアルポートを接続します。
- b. 以下のように、端末セッションを開始して、シリアルポートの出力を取り込みます。
 - Solaris OS を実行しているクライアントで、以下を入力します。

```
-> $ tip -9600 /dev/ttya
```

- Windows を実行しているクライアントで、Hyperterminal などのプログラムを開始します。

- Linux を実行しているクライアントで、Linux ディストリビューションに含まれているテキストベースのシリアル通信プログラムである、Minicomなどのプログラムを開始します。詳細については、Linux ディストリビューションに含まれている man ページを参照してください。

サービスプロセッサでログインプロンプトが表示されます。

2. 例えば以下のように、管理者としてサービスプロセッサにログインします。

```
login: root
password: changeme
```

サービスプロセッサでプロンプトが表示されます。

->

3. 以下を入力して、システムコンソールを起動します。

```
-> start /SP/console
```

システムの電源を入れるまで、システムコンソールは非アクティブ (空白) のままです。

4. 先の尖ったものを使用して、サーバーのフロントパネルにある埋め込み式の電源ボタンを押してから離します。電源ボタンの場所については、[図 1-19](#) を参照してください。

システムコンソール画面で、メッセージがスクロールします。

5. Solaris 10 の画面上のプロンプトに従います。

6. [52 ページの「インストールワークシートの情報の収集」](#) で収集した情報を援用して、プロンプトに従って、システムおよびネットワークの情報を入力します。

サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。

システム設定情報の入力後、サーバーによって警告が出され、システムが再起動します。再起動後、Solaris のログインプロンプトが表示されます。

これでインストールは完了です。

▼ コンソールの出力をビデオポートにリダイレクトするには



注意 – この手順は、Solaris の上級ユーザー専用です。bootenv.rc ファイルで問題を発生させると、サーバーの正常な機能が重度に妨げられたり、サーバーが起動しなくなったりする可能性があります。

これ以前のステップの完了後、SP へのログイン時に、コンソールの出力をビデオポートにリダイレクトする場合は、プロンプトで以下の引数を使用して、eeprom コマンドを実行します。

```
/eeprom console=text/
```

▼ コンソールの出力をルートデバイス、ルートミラー、または VGA にリダイレクトするには

サーバーのコンソールの出力は、シリアルポートに自動的に転送されます。X86 または X64 ベースのシステム用の Solaris OS では、オープンソースのブートローダーである、GRUB (GRand Unified Bootloader) がデフォルトのブートローダーです。GRUB は、システムの電源投入後に最初に実行されるソフトウェアプログラムです。

GRUB メニューでは、以下のように、ルートデバイス、ルートミラー、VGA からの起動オプションがあります。

```
GNU GRUB version 0.95 (619K lower / 4094912K upper memory)
*****
* Solaris 10 8/07 s10x_u3wos_10 X86
* Solaris failsafe *
* Solaris 10 8/07 s10x_u3wos_10 X86 (VGA) *
* Solaris 10 8/07 - Mirror disk *
* Solaris 10 8/07 - Mirror disk (VGA) *
*****
```

上下の矢印キーを使用して、エントリを選択して強調表示された状態にします。選択した OS を起動するには Enter を、起動前にコマンドを編集するには e を、コマンド行を開始するには c を押します。

▼ サービスプロセッサの IP アドレスを使用してサーバーに接続するには

注 - この手順では、Ethernet ケーブルを使用してサーバーをネットワークに接続していることを想定しています。

1. 以下のようにサービスプロセッサの IP アドレスを判定します。

- a. ボールペンで前面パネルにある埋め込み式の電源ボタンを押して、プラットフォームの主電源を入れます。
OS の起動の際に、電源投入時自己診断 (POST) メッセージが画面に表示されます。
 - b. システムが POST を実行している間に F2 キーを押して、BIOS セットアップユーティリティを開始します。
BIOS のメイン画面が表示されます。
 - c. **Advanced** を選択します。
Advanced 画面が表示されます。
 - d. **IPMI 2.0 Configuration** を選択します。
IPMI 2.0 Configuration 画面が表示されます。
 - e. **LAN Configuration** メニュー項目を選択します。
 - f. **IP Address** メニューオプションを選択します。
以下の書式で、サービスプロセッサの IP アドレスが表示されます。
Current IP address in BMC: xxx.xxx.xxx.xxx
2. クライアントシステムを使用して、サービスプロセッサの IP アドレスへの Secure Shell (SSH) 接続を確立します。

```
-> ssh -l root <sp_ip_address>
```
 3. 例えば以下のように、管理者としてサービスプロセッサにログインします。

```
login: root  
password: changeme
```
 4. SP のシリアルポートのデフォルト値を変更している場合は、デフォルト設定に戻してください。
デフォルト設定は、9600 ボー、8N1 (データビット 8、パリティなし、ストップビット 1)、フローコントロールなし、です。
 5. 以下を入力して、シリアルコンソールモードを開始します。

```
-> start /SP/console
```

注 – SP シリアルポートを設定できるのは、管理者権限のあるアカウントのみです。

6. 画面上の Solaris プリインストールプロンプトに従います。
7. [52 ページの「インストールワークシートの情報の収集」](#) で収集した情報を援用して、プロンプトに従って、システムおよびネットワークの情報を入力します。

サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。

システム設定情報の入力後、サーバーが起動プロセスを完了して、Solaris ログインプロンプトが表示されます。

▼ 端末プログラムを使用してサーバーに接続するには

1. ケーブルを使用してサーバーのシリアルポートと、端末プログラムを実行するホストシステムのシリアルポートを接続します。

ヒント – 端末集配装置アダプタには、Sun RJ45 が必要になる場合があります。シリアルポートのピン配列については、表 2-1 を参照してください。

2. システムのシリアルポートの通信プロパティは、デフォルトの設定にしてください。

デフォルト設定は、9600 ボー、8N1 (データビット 8、パリティなし、ストップビット 1)、フローコントロールなし、です。

3. 以下のように、端末プログラムを開始して、シリアルコンソールに接続します。Solaris OS を実行しているクライアントで、以下を入力します。

```
-> $ tip -9600 /dev/ttyx
```

ここで、x は、a、b、c などです。

Windows OS を実行しているクライアントで、HyperTerminal などのプログラムを開始します。

Linux OS を実行しているクライアントで、Linux ディストリビューションに含まれているテキストベースのシリアル通信プログラムである、Minicom などのプログラムを開始します。詳細については、Linux ディストリビューションに含まれている man ページを参照してください。

4. 例えば以下のように、管理者としてサービスプロセッサにログインします。

```
login: root  
password: changeme
```

5. 以下を入力して、シリアルコンソールを起動します。

```
-> start /SP/console
```

6. ボールペンで前面パネルにある埋め込み式の電源ボタンを押して、サーバーの主電源を入れます。

OS の起動の際に、画面に電源投入セルフテスト (POST) メッセージが表示されます。

▼ シリアルキャプチャプログラムを使用してサーバーに接続するには

1. ケーブルを使用してサーバーのシリアルポートとシリアルキャプチャホストシステムのシリアルポートを接続します。
2. システムのシリアルポートの通信プロパティは、デフォルトの設定にしてください。
デフォルト設定は、9600 ボー、8N1 (データビット 8、パリティなし、ストップビット 1)、フローコントロール無効、です。

3. 以下のように、端末セッションを開始して、シリアルポートの出力を取り込みます。

Solaris OS を実行しているクライアントで、以下を入力します。

```
-> $ tip -9600 /dev/ttya
```

Windows を実行しているクライアントで、Hyperterminal などのプログラムを開始します。

Linux を実行しているクライアントで、Linux ディストリビューションに含まれているテキストベースのシリアル通信プログラムである、Minicom などのプログラムを開始します。詳細については、Linux ディストリビューションに含まれている man ページを参照してください。

4. 例えば以下のように、管理者としてサービスプロセッサにログインします。

```
login: root  
password: changeme
```

サービスプロセッサでプロンプトが表示されます。

```
->
```

5. 以下を入力して、シリアルコンソールを起動します。

```
-> start /SP/console
```

6. 先が尖ったもので前面パネルにある埋め込み式の電源ボタンを押して、サーバーの主電源を入れます。

OS の起動時に、画面に POST メッセージが表示されます。

7. Solaris 10 の画面上のプロンプトに従います。

8. [52 ページの「インストールワークシートの情報の収集」](#) で収集した情報を援用して、プロンプトに従って、システムおよびネットワークの情報を入力します。

サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。

システム設定情報の入力後、サーバーが起動プロセスを完了して、Solaris ログインプロンプトが表示されます。

Solaris インストールプログラムの使用

このセクションにリストされたドキュメントでは、Solaris インストールプログラムを使用するための手順を説明しています。ドキュメントは以下の Web サイトで入手できます。

<http://docs.sun.com/>

SPARC ベースのシステムではなく、x86 ベースのシステム用の手順に必ず従ってください。詳細については、インストールした Solaris オペレーティングシステムのバージョン用の Solaris 10 Release and Installation Collection を参照してください。このドキュメントは、以下の URL で入手できます。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/solaris.10>

開始前のご注意

Sun Fire X4500/X4540 サーバーが以下のものと接続された状態にしてください。

- (オプション) モニター
- (オプション) キーボード
- (オプション) マウス
- Ethernet
 - NET MGT (SP) ポートを使用
 - 10/100/1000 ギガビット Ethernet ポートを使用
- 電源
- シリアルデバイス (コンソールタイプによる)

接続場所については、[図 1-17](#) を参照してください。

インストール時

あらかじめインストールされた Solaris OS の設定後、Solaris インストールプログラムによってシステムが再起動して、ログインするようにプロンプトが出されます。システムによって、その日のメッセージが表示され、システムに付属のロード済みのソフトウェアが示されます。

- Sun Java™ Enterprise System (Java ES)
- Sun Studio 11

このソフトウェアに加えて、Sun™ N1 System Manager が、システムボックスに含まれている DVD 内に入っています。

このソフトウェアのオンラインドキュメントは、以下の URL で入手できます。

<http://docs.sun.com/>

Sun Java Enterprise System

Sun Java Enterprise System (Java ES) は、ネットワークまたはインターネット環境を介して配布されるエンタープライズクラスのアプリケーションをサポートするために必要なサービスを提供する、一連のソフトウェアコンポーネントです。

Sun Studio 11 コンパイラおよびツール

Sun Studio 11 には、SPARC および x86/x64 プラットフォームで動作する、Solaris OS 用の高パフォーマンスの最適化 C コンパイラ、C++ コンパイラ、および Fortran コンパイラが含まれています。また、アプリケーションのパフォーマンス分析および混在ソース言語アプリケーションのデバッグ用のコマンド行ツール、および NetBeans ベースの統合開発環境 (IDE) も含まれています。これらのツールでは、マルチプラットフォームサポートが提供されており、gcc、Visual C++、C99、OpenMP、および Fortran 2003 と互換性があります。

Sun N1 System Manager

Sun N1 System Manager は、集合システムマネージャーであり、何百ものシステムを管理するアジリティを提供しながら、管理者がコストおよび複雑性を低減するのに役立ちます。N1 System Manager ソフトウェアを使用して、管理者は、どこからでも、単一のシステムから何百もの Sun システムに対して、検出、プロビジョニング、パッチの適用、監視、および管理を実行することができます。N1 System Manager ソフトウェアには、集中・対話型の使い易いブラウザおよびコマンド行インタフェース (CLI) が使用できるというメリットがあります。これらを使用して、管理者は、単一のシステムまたはシステム群に対して迅速かつ正確に変更を加えることができます。

詳細については、以下の URL にアクセスしてください。

http://www.sun.com/software/products/system_manager

インストール後

Solaris OS は、物理スロット 0 のハードディスクにあらかじめインストールされており、物理スロット 8 のハードディスクにミラーリングされています。物理スロット 2 から 26 のハードディスクは、単一の ZFS ボリュームとして設定されています。サーバーの管理方法の詳細については、以下のドキュメントを参照してください。

このタスクでは...	このドキュメントを参照してください...
ハードディスク管理、hd ユーティリティー、あらかじめインストールされたディスクのミラーリングなど、サーバーの管理、設定、および監視	『Sun Fire X4500/X4540 Administration Guide』(Sun Fire X4500/X4540 管理ガイド)
Solaris OS のインストールオプション	『Solaris 10 Release and Installation』(リリースおよびインストール) ドキュメント
SunVTS 診断ソフトウェア、イベントログと POST コード、LED、およびエラー処理など、問題の診断	『Sun Fire X4500/X4540 Diagnostics Guide』(Sun Fire X4500/X4540 診断ガイド)
ZFS ファイルシステム	『ZFS Administration Guide』(ZFS 管理ガイド)

hd ユーティリティー

hd ユーティリティーをインストールすることをお勧めします。hd ユーティリティーを使用すれば、サーバーの論理デバイスと物理デバイスをマップできます。システムの管理、ハードディスクの管理、およびシステムのトラブルシューティングを行うためには、このマッピングを理解する必要があります。hd ユーティリティーは、以下から入手できます。

- システムボックスに含まれている、SunVTS のブート可能な診断用 CD
- /usr/bin/hd にあらかじめインストールされています
- 以下の Web サイトのダウンロードセクション

<http://www.sun.com/servers/x64/x4500/support.xml>

<http://www.sun.com/servers/x64/x4540/support.xml>

ユーティリティーの詳細については、製品ドキュメント Web サイトにある、x64 Servers Utilities Reference Manual (x64 サーバーユーティリティーリファレンスマニュアル) を参照してください。Solaris 10 オペレーティングシステムを再インストールした場合は、pkgadd コマンドを使用して、hd ユーティリティーを再インストールする必要があります。

Solaris オペレーティングシステムの再インストール

Solaris OS を再インストールする場合、または別のバージョンの Solaris OS をインストールする場合は、DVD およびネットワーク (Preboot eXecution Environment [PXE] を使用) など、いくつかの方法でインストールできます。

ステップバイステップの手順については、ドキュメント『Solaris 10 Installation Guide: Basic Installations』(Solaris 10 インストールガイド: 基本インストール) を参照してください。

Solaris 10 オペレーティングシステムのインストールに加えて、製品ダウンロードサイトで記載されているように、必要なパッチをインストールする必要があります。製品ダウンロードサイトにアクセスするには、以下のいずれかの Web サイトの「Downloads」セクションをご覧ください。

<http://www.sun.com/servers/x64/x4500/support.xml>

<http://www.sun.com/servers/x64/x4540/support.xml>

ソフトウェアのダウンロード

ソフトウェアの再インストールが必要な場合は、以下のサイトからソフトウェアをダウンロードすることができます。

- Solaris 10 オペレーティングシステムをダウンロードするには、以下を参照してください。

<http://www.sun.com/software/solaris/get.jsp>

- パッチをダウンロードするには、以下を参照してください。

<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=home>

他のオペレーティングシステムのインストール

他のオペレーティングシステムのインストール方法については、以下を参照してください。

- 『Sun Fire X4500/X4540 Server Operating System Installation Guide』 (Sun Fire X4500/X4540 サーバーオペレーティングシステムインストールガイド)
- 『Sun Fire X4500/X4540 Server Windows Operating System Installation Guide』 (Sun Fire X4500/X4540 サーバー Windows オペレーティングシステムインストールガイド)
- 『Sun Fire X4500/X4540 サーバーご使用にあたって』

他のオペレーティングシステムでソフトウェアをアップデートする必要があることがあります。インストールする OS をサポートするソフトウェアリリースの該当するリリースノートを参照してください。

索引

C

CLI

- コマンド
- ネットワークおよびシリアルポート, 47

D

DHCP

- ILOM, 40
- 設定, 42

DHCP の設定, 42

G

GRUB メニュー, 63

I

ILOM

- BIOS 設定ユーティリティーでの設定, 41
- CLI
 - 静的 IP, シリアル, 44
- DHCP の設定, 42
- Ethernet での設定, 40
- Ethernet 接続, 40
- 遠隔コンソールアプリケーション, 37
- クライアントサイドの Secure Shell (SSH), 37
- コマンドリファレンス, 46
- サービスプロセッサハードウェア, 36
- サービスプロセッサファームウェア, 37
- シリアルでの設定, 38
- シリアル接続, 38
- ソフトウェアコンポーネント, 36
- 概要, 36

Integrated Lights Out Manager: ILOMを参照

IO ボード

MAC アドレス, 55

M

MAC アドレス, 39, 42

IO ボード, 55

SP, 55

S

Solaris 10 オペレーティングシステム

ダウンロード, 70

SP

MAC アドレス, 55

Sun Rack 1000, 9

V

VGA リダイレクション, 51

い

インストール

Solaris 用ワークシート, 52

あらかじめインストールされた Solaris OS の設定, 51

え

遠隔コンソールアプリケーション, 37

き

機械によるリフト, 4

緊急の停止, 33

く

クライアントサイドの Secure Shell (SSH), 37

け

ケーブルの接続, 28

ケーブル管理アーム, 20

こ

互換性のあるラック, 5

コンポーネントの取り外し、方法, 4

さ

サーバーの電源の投入, 30

サーバーの配線, 28

サーバーへの接続

 SP の IP アドレスの使用, 63

 端末プログラムの使用, 65

サービスプロセッサ

 Ethernet での設定, 40

 シリアルでの設定, 38

 ハードウェア, 36

 ファームウェア, 37

サービスプロセッサに接続, 60, 61

サービスプロセッサへの Ethernet 接続, 40

サービスプロセッサへのシリアル接続, 38

し

シリアル番号 (図), 14, 15, 33

す

スライドラール構成部品, 6

せ

正常な停止, 33

狭い通路用取り外しキット, 28

た

端末プログラム, 65

て

停止

緊急, 33

正常な, 33

と

ドキュメントセット, 2

取り付け

 概要, 3

取り付けに必要なツール, 4

取り付けの概要, 3

は

背面パネルコネクタ, 28

ひ

ビデオポートへのリダイレクション, 63

ふ

フィードバック電子メールアドレス, xiii

ら

ラックマウントテンプレート, 8